
ソニック・ザ・ヘッジホッグ「エメラルドの暴走」

こた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソニック・ザ・ヘッジホッグ「エメラルドの暴走」

【Nコード】

N2548Y

【作者名】

こた

【あらすじ】

いつものようにソニックとエッグマンは戦っていた。

ソニックが七つのカオスエメラルドを使いスーパーソニックへ変身し、誰もが勝負はついたと確信した…

しかし、異変は起こった。

突然暴れ出し、ソニック達を攻撃するカオスエメラルド。

一体カオスエメラルドになにが起こったのか？

そして、禍々しい暗黒色のハリネズミ 「ダーク・ザ・ヘッジホッグ」。

彼の目的は？そしてその正体は？

ソニック達の新たな冒険が始まる！

はじめまして こたと申します。
初投稿です。

よろしくお願ひします？

(追記) 挿絵 「。。。海兔。。。」様「http://www.

pixiv.net/member.php?id=360718

」

Character introduction (前書き)

ソニックをご存知ない、もしくはあまり詳しくない方もいらっしゃると思うので、一応キャラ紹介をします。

Character introduction

【ソニック・ザ・ヘッジホッグ】（主人公）

種別 ハリネズミ

年 15歳

特徴

- ・全身が青い
- ・大きな白い手袋
- ・赤いスニーカー
- ・大きなトゲ（数本）

特技

- ・超音速で走ること
- ・スーパー化

（スーパー化とは、七つ集めると奇跡を起こすと言われている「カオスエメラルド」のパワーを取り込んでパワーアップすること。通常時を遥かに超える能力を有し飛行も可能だが、極端にエネルギーを消費するため短時間しかスーパー化を維持することが出来ない。）

自由気ままが大好きで曲がったことが大嫌い。短気なところがあるが、困っている人は放っておけない優しさを持つ。約束は守り、絶対に裏切らない。ただし、じっとしていることや水は苦手という欠点もある。

【マイルス・パウアー】（通称 「テイルス」）

種別 キツネ

年 8歳

特徴

- ・全身が黄色い
- ・大きな白い手袋
- ・大きな2本の尻尾

特技

- ・尻尾を回転させて飛ぶ
- ・機械いじり

心優しい子ギツネ。過去に尻尾が二本あることでいじめられていたが、ソニックの走る姿を見て勇気づけられ、彼の後を追いかけることになった。機械いじりが大好きで、その能力を活かしソニックをサポートする。

【ナックルズ・ザ・エキドゥナ】

種別 ハリモグラ

年 16歳

特徴

- ・全身が赤い
- ・手が大きく、手の甲に二本のトゲが付いている

特技

- ・穴掘り
- ・壁登り
- ・滑空

ソニックの喧嘩友達で良きライバル。「マスターエメラルド」という不思議な力を持つ大きなエメラルドの守護者。生真面目であるため、よくエッグマンに騙されることも。トレジャーハンターでもある。彼の拳は強力で、大きな岩も軽々と破壊できる。

【Dr・エッグマン】

種別 人間

年 不明

特徴

- ・ 体型が卵の様に丸い
- ・ 目に小さく丸いサングラス（と思わしきもの）をかけている

自分勝手にわがままな「自称」悪の天才科学者。IQ300と高い知力を持つが、人の迷惑を考えない。何度も計画をソニックに阻止されている。

【シャドウ・ザ・ヘッジホッグ】

種別 ハリネズミ

年 不明

特徴

- ・ 全身が黒い（赤い箇所もある）
- ・ 見た目がソニックと瓜二つ
- ・ 走る時は地を蹴って走るといふより、靴から出る空気ですケートの様に滑走する様に走る。

特技

- ・ 音速で走る
- ・ カオスコントロール
- ・ カオスブラスト
- ・ カオススピア
- ・ スーパー化

「Dr・エッグマン」の祖父にあたる世紀の天才科学者「プロフェッサー・ジェラルド」によって生み出された究極生命体。「カオス

エメラルド」を使い、時空を歪ませることが出来る『カオスコント
ロール』の力を与えられている。

【シルバー・ザ・ヘッジホッグ】

種別 ハリネズミ

年 14歳

特技

- ・ 超能力を使って物を動かし、それを投げて攻撃できる
- ・ ESPによる飛行
- ・ スーパー化

荒廃した未来を変えるべく、未来からやって来たハリネズミ。様々
なサイコキネシスを使う。

【ハイク】（本名は不明）（オリキャラ）

種族 ハリネズミ

性別 男

年 ？

朱色の体を持つハリネズミ。見た目はソニックと少し似ているが、
頭に大きな毛が立っている。（本人は少し気にしている。）記憶を
失っているが、正義感が強く熱い。銃使いであり、その腕前はかな
りのもの。ただし、ムキになると危険な銃弾を使うが本人はそれを
危険と感じない。また、なかなかの俊足。

> i 3 6 4 7 5 — 4 5 7 1 <

【ダーク・ザ・ヘッジホッグ】（オリキャラ）

種族 ハリネズミ
性別 男
年 ？

今回の事件の主犯。カオスエメラルドを操る能力を持つ。シャドウの行方を追っているが、目的は不明。

> i 3 6 7 4 8 — 4 5 7 1 <

【エミー・ローズ】

種族 ハリネズミ
性別 女
年 14歳

「自称」ソニックのガールフレンド。今回もソニックを追いかけているが……。

C h a r a c t e r i n t r o d u c t i o n (後 書 き)

参考 ソニックチャンネル(公式HP)

Prologue

見渡す限り広い草原が広がっている

草原の真ん中で「彼」は昼寝をしていた。

太陽が少し眩しい。

だが、そよ風が心地良い。

近くで小河が流れている。

水の流れる音が心を静かにする。

チチチ

小鳥のさえずりが聞こえる。

なんて……平和なんだろう……

穏やかな表情を浮かべ、「彼」は目をつぶりながらそう思っていた。

「彼」は朱色の体をしており、背中には数本の大きなトゲがある。また二本の大きなベルトを身に付けており、片方は腰に、またもう片方は無造作に肩にかけていた。

大きな草が生えているところで、「彼」は少しウトウトしていた…

その時

「ん………？」

空で起きている小さな異変に気づき、「彼」はゆっくり目を開ける。

「………！？」

「彼」は驚いて体を起こした。

少し目を疑った。

「彼」の寝ている場所だけ日陰になっている。

しかし空に雲は一つもなく、周囲にもその要因となるような物はなかった。

「な………なんだこれ………」

「彼」は小さく呟いた。

その時空に気配を感じ、「彼」は空を見上げる。

「違う……シャドウ・ザ・ヘッジホッグじゃない……」

どこからか不気味な声が聞こえた。

「誰だっ!?!」

「彼」は空を見上げたまま腰のベルトに装着していた拳銃二丁を取り出した。

「……まあいい、教えてやろう……」

シューウウウウウウウウウウ……!!

声のする方に禍々しい黒い煙のようなものが集まった。

鳥達はこの存在に気がついたのか、皆飛び去っていった。

その煙はだんだん一匹のハリネズミとなった。

そのハリネズミはゆっくりと地上に降り立つ。

サクッ

草を踏む音が少し大きく聞こえた。

「俺の名は……ダーク。ダーク・ザ・ヘッジホッグだ。この世の唯一にして究極の存在……」

静かな物腰でこそあるが、海の底のように冷たい群青の瞳と漆黒で背中に悪魔のような翼の生えた体を持つハリネズミ　ダークは不敵にそう言い放った。

「……あんたが俺に何の用だが知らないが……究極の存在だって？ハッ！笑わせるな。悪いが俺にはあんたが究極の存在だなんてちっとも思えないね。」

チャキッ！

「彼」はダークに二丁の銃を構えながら言った。

「……貴様に用は無い……だが、折角だ。俺が究極の存在である証拠を見せてやるう。」

ザッザッザッザ……

ダークは不気味な微笑みを顔に浮かべながら、「彼」に向かってゆつくり歩き始めた。

「来るな！」

ダンッ！ダンッ！！

「彼」はダークに銃を撃った。

ビシッ！ビシッ！！

「なっ……！！！」

弾は当たったが、ダークは表情一つ変えずに近づいてくる。

「これならどうだっ！」

ジャキッ！

「彼」は一旦銃を下ホルダーに戻し、背中から先程の銃よりも数段威力の高いグレネードランチャーを取り出した。

「行っけえ　　！！！」

ドンッ！ドンッ！！ドンッ！！！

「彼」はダークに向かってグレネードを三発撃った。

ドガ　　ン！！！！

グレネードはダークに命中し爆発した。

その衝撃で周りの草が燃えているのが分かる。
しかし、ダークの姿は噴煙で見えない。

シュ~~~~ッ
……

煙が大分引いてきた。

「……つな！なんだとっ！！？」

「彼」は自らの目を疑った。

彼の周囲こそ惨状と化していたものの、ダーク本人は無傷だった。

その上未だにこちらに向かってゆっくりと歩き続けている。

「くっ、くっそお　！！」

ダッ！！

「彼」は走り出した。

「俺の足の速さをなめるなよ！！お前なんかを追いつけるものか！」

「彼」は走りながら振り返った。

「……つな！？」

さっきまでダークが居た場所にダークは居なかった。

「言っただろう…？この世の絶対にして究極の存在だ…と。」

「!?!」

「彼」は正面に向き直った。

そこには片手を「彼」に向けているダークが居た。

「やっ、やばい…!」

このスピードだと止まれない…!

ダークの手に紫色の光が集まる。

「…………消える」

ドゥンッ…!

ダークの手から黒い閃光が迸った。

ズガアアッ

「うわあああああっ！！！！」

「彼」はビームに直撃し、空中に投げ出された。

ドザッ！！

「彼」は地面に叩きつけられ、意識を失った。

「……………フン。」

蔑むように嘲笑うとダークは姿を消した。

????????????????

「……くっ……」

太陽が西へ沈もうとしているとき、「彼」はようやく目を覚ました。

「彼」はよろよると立ち上がった。

「ガッ!!?」

「彼」は再び倒れそうになった。

全身に負った怪我が鋭い痛みとなって彼の体に奔った。
砂嵐に見舞われたように目の前が霞む。

「……ここは……どこだ……?」

SONIC VS EGGMAN

ドガンー!!

ヒュ~~~~~ドーン!!!

何発もの爆音が響く。

ここは自分勝手にわがままな「自称」悪の天才科学者、Dr・エッグマンが作った基地の中だった。

基地の中は昼間であるにも関わらず、少し薄暗く感じられた。基地内の司令塔のような大きな建物が不気味にそびえ立っている。

名前の通り卵のような体をしているエッグマンは、毎度のように自分が作った大きなロボットに乗り「彼」を追いかけていた。

「待~~~~え~~~~!!」

エッグマンはロボットを操縦しながら叫ぶ。

「COME ON!!」

「彼」 ソニックは走りながら言った。

音速で走り回る青いハリネズミ ソニック・ザ・ヘッジホッグ。
大きな白い手袋と赤いスニーカーが特徴的な彼は、何度もエッグマ

ソンの手から世界を救ってきた世界最速のハリネズミである。

「くぅ〜！！…忌むしいハリネズミめ！」

エッグマンがミサイルを撃ちながらソニックを追いかけていた。

ピュ〜〜〜〜ド　ソン！！！！

ミサイルがソニックに向かって飛ぶが一発も当たらず、全て壁や床に当たる。

「へへっ！遅い攻撃だなエッグマン！」

ソニックは走りながら叫んだ。

「だまれ！！くぅ〜！当たれ！！」

ソニックはロボットの攻撃をスイスイ避けていく。

その時

ドカーン！

「むぅっ！！？」

何かがロボットを攻撃した。

「ソニックー!!」

ブ~~~~ン!

その正体は愛機の小型飛行機・トルネードに乗ったテイルスの放ったミサイルだった。

彼は二本の尻尾を持った黄色の子ギツネで、ソニックの良きパートナーである。

「ソニック! 援護するよ!!」

テイルスは操縦席から笑顔を見せながら言った。

「THANKS!!」

ビッ!

ソニックはテイルスに親指を立てた。

「忌々しいのが二匹になりおったワイ! こうなったらフルパワーじ

や！！」

ガチャツ、ガチャツ！

ギユイ　　ン！！

ロボットは変形しさらに大きくなった。

「へへっ、そうこなくっちゃ！」

ソニックは余裕たっぷりにはくそ笑んだ。

「その余裕もそこまでじゃ！覚悟しろい！！！」

ゴオオツ！！

ロボットのスピードが上がった。

「俺に追いつけるかな？」

バビュンツ！！

ソニックもさらにスピードを上げた。

ド　　ンッ！！

その際にソニックはロボットにホーミングアタックをした。

「きかぬわっ！！」

ギユワア　　ン！！

バキィッ！！

ロボットは勢いよく回転し、ソニックを弾き飛ばした。

「うわぁっ！」

ババッ！

ソニックは空中で体制を整えて着地した。

エッグマンはテイルスの方を見た。

「貴様の相手はこいつじゃ！ポチッとな！！」

エッグマンは再びソニックを追いかけた。

「COME ON!! COME ON!!」

ダッ!!

ソニックは逃げながら言った。

「ハッ!!」

シュンッ!!

ソニックの姿が消えた。

「なにいつ!? ソニックめ、どこへ消えた!?!?」

エッグマンは辺りを見回した。

「じじじっ!!」

頭上から声がした。

「むうっ!?!」

エッグマンが上を向いた。

ギューイイイイ

ン!?!!

そこには回転しながら落下してくるソニック。

ドガ　ン!?!

「のわぁっ!?!」

ソニックはロボットの頭上に回転しながらアタックした。

「まだまだじゃあ〜!?!」

ギユワ　!?!

ロボットは再び回転を始めた。

「ぐぁっ!?!」

ソニックは再び弾き飛ばされた。

ババツ！

ドガアンー！！

ソニックは空中で体制を整え、壁を蹴りもつ一度ロボットにアタックした。

「きかぬと言っとなるじゃろがー！！」

ギユワ ！！

エッグマンはロボットを再び回転させ、ソニックを弾き飛ばした。

「うわぁっー！！」

ソニックは空高く弾き飛ばされた。

「ホ ホホホ ！！ソニックよ！貴様を倒すために新しくつくったこの「E Z」はそう簡単に倒すことは出来んぞ ！！」

エッグマンは高笑いをした。

「さあ て、どうかなあ ？」

ソニックは空中で不敵に笑いながら言った。

「ふんっ、貴様は「E Z」を倒すどころか傷一つすらつけておらんぞー！」

エッグマンは憎たらしく言った。

その時

キラアツ…

ソニックの周りに赤、青、黄、緑、白、水色、紫の光が現れた。

「さて、これはなんでしょう？」

ソニックはにやけながら言った。

「んなっ……き、貴様、まさかっ！…！？」
エッグマンは叫んだ。

そう……ソニックの周りに現れたのは七つ集めると奇跡を起こすと
言われている カオスエメラルド。

ソニックは目を閉じた。

グオオオオオツ!!!

カオスエメラルドがソニックの周りを勢いよく回り始めた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!!
!!!!!!!」

ソニックの体が徐々に金色になっていく。

「やった!スーパーソニックだ!!」

テイルスはミサイルを破壊しながら嬉々としてそう叫んだ。

シユオオオオオオツ!!

「ハアアツ!!!!!!」

ドンツ!!!!!!

ソニックはカオスエメラルドを取り込み神々しい金色の光を纏う
スーパーソニックになった。

「さあ て、遊んでやるぜエッグマン!!!!」
ソニックは宙に浮きながら余裕たっぷりに告げた。

「ぬおおおっ!!!!」
エッグマンは焦りだした。

SILVER VS DARK

一方その頃……ソニック達が戦っている場所から遙か離れた場所にある水の公国 「ソレアナ」に一匹のハリネズミが居た。

「ソレアナ」は海上都市であり、以前ソニック達が長き戦いを繰り広げた場所でもあった。

「……ああ ……！ 今日も平和だな ……！」

ソレアナの街から少し離れた浜辺で一人ねっころがりながら大きく伸びをした銀色のハリネズミ シルバー・ザ・ヘッジホッグは一人呟いた。

雪のような銀白の毛皮に身を包まれ、ブーツを思わせる少し丈の高い靴が彼の気高さを彷彿とさせる。

ザザ ……！！

潮の良い匂いがする。

海の潮風が、彼の白い胸毛を揺らす。

その時

「……………」

彼は異変を感じ、静かに目を開いた。

しかし周りに誰もおらず、目の前には半透明の海、空にはカモメが飛んでいるくらいだった。

「……………気のせいか。」

そう呟き、再び目を閉じた時

「……………違う、こいつもシャドウじゃない。」

突然聞こえた不気味な声にシルバーは体を起こし、周りを見回した。

「誰だ!？」

シルバーは周りを見回しながら叫んだ。

「!？」

シルバーは上空に気配を感じ、空を見上げる。

「な、何だあれ!？」

気配のあるところに禍々しい黒い煙のようなものが集まった。

そしてそのまま一匹の漆黒のハリネズミになった。

「なっ!……お前は……メフィレス!!？」

シルバーは身構えながら言った。

確かにその姿はメフィレスに似ていた。

かつて荒廃した未来で自分を騙し、ソニックを殺させようとして全ての歴史の抹殺を企んだあの男

「メフィレス・ザ・ダーク」に。

奴は「炎の災厄 イブリース」と融合し、再び「過去・現在・未来」
同時に存在する超次元生命体 「ソラリス」となった。

だが、奴は俺とソニック、そしてシャドウと共に倒したはず。

なのに何故……？

フワッ……

漆黒のハリネズミは無言で海の上に舞い降りた。
彼の背中にある大きな黒い翼がバサリと音をたてる。

「……メフィレスとは誰の事だ？俺はダーク。ダーク・ザ・ヘッジ
ホッグだ。」

そのハリネズミ ダークは静かに言い放った。

「……この世の絶対にして究極の存在だ。」

「……それで、その究極の存在が俺に何の用だ？」

シルバーはダークを睨みつけながら言った。

「貴様に用は無いが……折角だ。俺の力を見せてやるう。」

スッ

そう告げるとダークは静かに右の掌を左肩の方へやった。

そして掌に雷光の如く黒い光が集まる。

バチバチバチバチ

!!!!

「!?!」

シルバーは驚愕していた。

「ダークスピア!」

ビュンッ!!

ダークが腕をシルバーに向かって振り下ろすと、数本の黒い光の矢が一齐にシルバーに襲いかかった。

「無駄だ!!」

シルバーは両手を前に突き出した。

ピタッ!!

矢は全てシルバーの周りで青白く光り、静止した。

「……………ほう。」

ダークは微かに驚いた表情を見せた。

「俺の超能力をなめるなよ!お返しするぜ!」

ビュンッ!!

グオオオオオッ!!

シルバーがダークに向かって腕を振ると矢は全てダークに向かって飛んでいった。

ドガーーーン!!

ダークに命中すると矢は爆発した。

シューウウウウ

煙が晴れると……

「なっ、何!?!」

シルバーは驚き目を見開いた。

薄れてきた煙の中にダークが無傷で浮いていたからである。

「これでどうだ!」

バツ!

シルバーは大きく跳躍した。

「くらえっ!」

バリバリッ!!

シルバーはダークの近くに着地し、周りにサイキネシスを放った。

バシユンッ!!

それは命中したものの、ダークは表情一つ変えずに浮かんでいる。

「……なかなかやるようだが、そんな程度で俺を倒す事は不可能。」

「なっ!?!」

シルバーは自分の目を疑った。

「もっいいい……消える。」

静かに言い放つと、ダークは片手をシルバーに向けた。

グオオオオオオオオオオオ!!!

ダークの掌に黒い光が集まってきた。
どれほど強い威力を發揮するのかは、その光の大きさを見れば一目瞭然だった。

その余派がダークの足元の海水を大きく揺らしている。

「くっ、くそっ!」

まずい、やられる !

シルバーは防御体制に入り、目を閉じた。

その時

ギユウウウウウウウ……………ン

ダークの強大で禍々しいオーラが徐々に薄れていくのを感じた。

「……………？」

シルバーは徐に目を開けた。

「……………」

ダークは無言で海の彼方を見つめている。

「……………あつちに大きな力が……………この力はカオスエメラルドか……………？」

「カオスエメラルド……………だと？」

シルバーは思わずそう尋ねた。

ダークはシルバーの方に向き返した。

「……今回は見逃してやる。次会った時は容赦無く消す。」

ギユウウウウン！

そう告げるとダークはゆっくり上昇した。

「ハアツ！！」

ドシュツ！！

ダークは遙か彼方に飛び去っていった。

「……なんだっただんだあいつは……？」

シルバーは呆然としたまま、そう呟いた。

「カオスエメラルド……何か嫌な予感がするが、このまま奴を放っておくわけにはいかない。」

ボワアッ…!

シルバーの体が青く光った。

ふわぁっ……

そしてそのままシルバーの体がゆっくりと宙に浮かんだ。

「ハアッ!」

シュンッ!!

そして、そのままダークの消えた方へと猛スピードで飛び去っていった。

SILVER VS DARK (後書き)

この話は「新ソニ」が終わってから約一週間程経った頃という設定で読んで頂けたら嬉しいですよ。

原作では「ソラリス」を倒した後はシルバーはもう未来に帰っていますが、今作ではシルバーはまだ未来に帰っていない設定です。理由はご想像にお任せします(笑)

STARTING OVER

戦いの場は再びエッグマンの基地に戻る……。

「どうしたエッグマン？さっきまでの威勢はどこ行っただ？」

スーパーソニックは宙に浮かびながら余裕たっぷりと言った。

「ぐ、ぐぬぬ……」

エッグマンは悔しそうな表情を見せている。

カオスエメラルドの力を使いパワーアップしたスーパーソニックは、エッグマンのロボットを圧倒的な力で攻撃し続けた。連続攻撃を受け、ロボットは既にボロボロであった。

「このまま一気に終わらせてやる！！」

ソニックは叫んだ。

「く……く、くそ　！　またしてもワシの計画を邪魔しおって

！！」

エッグマンは最早なす術がなかった。

????????????????

その頃、ソニック達の居る場所より遙か上空に一匹のハリネズミが居た。

「……シャドウに似ているがシャドウじゃない。奴は一体何者だ……? まあいい、どうやら奴はカオスエメラルドの力でパワーアップしたようだな。俺の力でちょっと遊んでやるか。」

スッ

ハリネズミ ダークは静かに片手をソニックに向けた。

そんなダークの姿に気づきもしないソニックは、エッグマンに最後
に人差し指を立てた。

「覚悟しな、エッグマン！！！！」

ドンッ！！

ソニックは一気に力を開放した。

「くっ、もはやここまでか……」

エッグマンは目を閉じた。

しかし、そのまま何ら変化が起こることはなかった。

「……………」

エッグマンは静かに目を開けた。

シューウウウウウウウ……

スーパーソニックの力が少しずつ弱まっていくのが分かる。

「ぐっ……ぐぐぐっ……！！！」

スーパーソニックは苦しげな面持ちだった。

「ソニック、どうしたの？」

テイルスがトルネードの操縦席から尋ねかけた。

「ぐっ……体が……動かないっ……！！！」

スーパーソニックは苦しそうに言った。

「えっ！？」

テイルスは尋ね返した。

ニイイツ！

それを聞いたエッグマンの表情に笑みが浮かぶ。

「ホ　　ホホ　　！！情けないのうソニック！攻撃チャンスじゃ
「！！！」

ウイイイイン！

ロボットの片腕がゆっくり上がっている。

「やめる　　！！エッグマン！！！」

ドガ　　ン！！

テイルスがミサイルを放ち、見事ロボットに命中する。

「ぎゃああ　　っ！！！」

ガシヤ　　ン！！

ロボットは体制を崩した。

「くう〜！邪魔な子ギツネめ〜！！」

エッグマンはギリギリと歯軋りしながら言った。

「大丈夫！？ソニック　ク？」

ソニックを振り返ったテイルスは驚いて声が出せなかった。

ソニックは頭を抱えている。

「ぐぐぐぐぐ！！うおおおおおお！！！！！！」

ビカ　　ン！！

スーパーソニックの叫びと共にソニックの体から七つのカオスエメラルドが抜け、本来の青いハリネズミの姿に戻った。

「なぬっ！？」

ソニックと対峙しているエッグマンすら自らの目を疑った。

ドサッ！

ソニックは地に落ちその場に倒れた。

「ハア ハア 」

ソニックは両手両足を地面に付けたまま荒呼吸をしている。

コオオオオッ

そして上空には異様な光を放つカオスエメラルドが浮かんでいた。

「何がどうなっておるのじゃ?!」

エッグマンがそう言った瞬間

ギユイイ　　ン！

ズガアツ！！

カオスエメラルドは肉眼ではとらえられないほどの速さで凝結し、エッグマンのロボットを貫いた。

「やっ　　やっぱりこうなるのね……」

涙ながらに嘆くエッグマンのもとで

ドガ　　ン……！！

ロボットは爆発した。

「のわああああああああああああああ……！！……！！……！！……！！」

エッグマンは遙か彼方に弾き飛ばされた。

T A R G E T

「んなつ!?!」

ようやく呼吸が整ったソニックは驚いていた。

なんだっ たんだ……? ?

そう思いながら分裂し七つに戻り、まとまらない動きで浮揚するカオスエメラルドに近寄った。

その瞬間

ピカアッ!!

カオスエメラルドが眩い光を放った。

「っな!?!」

ソニックは思わず足を止めた。

「ソニック、危ない!!」

ヒュンツ!

テイルスが叫んだ瞬間、カオスエメラルドの一つが猛スピードで突っ込んだ。

「のわっ!?!」

バツ!

ソニックはギリギリでそれをかわした。

「くっ、SAFE!」

バツバツ!!

ソニックは大きくバックステップをし、カオスエメラルドから離れた。

「ど、どうなってんだ？」

コオオオオオツ

異様な光を放ち続けるカオスエメラルドに視線を投げかけながらソニックは呟いた。

ヒュッ！

そして再び一つがソニックに襲いかかった。

「くっ！」

ソニックはまたもギリギリでかわした。

「くそ、何てスピードだ！」

バツ！

再び大きくバックステップをしながらソニックは苦々しげにそう呟いた。

「ソニック、乗って　！！」

トルネードがソニックに近づいてきた。

その時

ピカアアッ！！！！

カオスエメラルドは再び強い閃光を放った。

「ま、マズい！！テイルス！来るな　！！！」

ソニックは叫んだが　　最早手遅れだった。

バキィッ！！

カオスエメラルドが再び肉眼で見えないほどの速さで凝結し
トルネードを貫いた。

「なっ！！？」

ヒュルルル

ソニックの叫びと共にトルネードは回転しながら墜落し、

ドガ ソー！！

そのまま爆発した。

「テ、テイルス
！！！！！！！！」

！！！！！！

ソニックは叫んだ。

墜落した所から大きな黒煙がもくもくとあがっているのが分かる。

ドガアッ!!

「ぐあっ!!」

トルネードの墜落に気を取られている隙に、カオスエメラルドのつがソニックの腹に猛スピードで突っ込んだ。

「ぐっ!!」

ソニックは腹を押さえながら片膝をついた。あまりの激痛に一瞬頭が真っ白になった。

「く……」のままじゃやられる　「!

ソニックがそう思った瞬間

ビュンッ!!

「のわあっ!?!」

黒い影が突然現れ、ソニックの腕を掴んだ。
そのまま猛スピードでどんだんカオスエメラルドから遠ざかって行く。

「だ……誰だ？」

空いている方の手で痛みが取れない腹を押さえながら、ソニックは自分の腕を掴んでいる者を見た。

ソニックの腕を掴みながら音速で走る……いや滑走する者の正体は

……

「お前は シャドウ!?!」

彼に瓜二つの黒いハリネズミ シャドウ・ザ・ヘッジホッグ
グだった。

「……………」

表情一つをも変えることなく、シャドウは無言で滑走し続けた。

バツ！！

シャドウは大きく跳躍し、エッグマンの基地から脱出した。

ストツ

軽やかに着地し、そのまま再び滑走しはじめた。
その地を滑る音は、まるで氷の上を滑るアイススケートの様な音だった。

基地から大分離れた所でシャドウは徐々にスピードを落とし、

ドサツ！

「おわっ！」

シャドウは乱暴にソニックの腕を離した。

ソニックはバランスを崩し地に倒れた。

「……………」

ドシユッ！

相変わらず無口のままシャドウは猛スピードでどこかに走り去り、あつという間に姿が見えなくなった。

「シャドウ……………」

ソニックはシャドウの消えていった方向を見ながらそう呟いた。

????????????????????

「……………くっくっく……………ハ　　ツハツハツハ！！！！！」

上空からソニック達を見下ろしていたダークは突如高笑いをした。

「とうとう見つけたぞ……シャドウ・ザ・ヘッジホッグ!!!!!!!!!!」

ドギョーンッ!!

ダークは目にもとまらぬ速さでシャドウを上空から追跡した。

“ ONLY ” VS “ ULTIMATE ”

「なにいつ!? テイルスが!？」

ソニックから一部始終を聞いた赤いハリモグラ 「ナックルズ・ザ・エキドゥナ」は驚き目を見開いた。

ソニックはその後ナックルズを訪ねていた。

とある特別なエメラルドを守りながら暮らすナックルズはソニックの昔からの喧嘩友達であり、良きライバルである。

ナックルズの住んでいる場所は森の中にある、少し神秘的な感じを受ける場所だった。

65

そんなナックルズの間いかけにソニックは目を閉じながらゆっくり頷いた。

「……………くっ!」

ナックルズはソニックに背を向けた。

「暴走したカオスエメラルドを止めるためにマスターエメラルドが必要なんだ。貸してくれないか？」

ソニックは尋ねた。

カオスエメラルドの暴走を止める力を持つマスターエメラルド

あれを使えばカオスエメラルドを止められるかもしれない。

ソニックはそう考えていた。

「……………それがな……………」

ナックルズはソニックに背を向けたまま話を続けた。

????????????????

シャドウは荒野を滑走していた。

見渡す限り茶色っぽい風景が広がっている。

周りは茶色く大きな岩がゴロゴロ転がっており、植物は見当たらず生物の気配は無かった。

「……………」

シャドウは滑走を続けると同時に 「何か」の気配を感じていた。

キッ！

シャドウは急に立ち止まった。

バツ！

振り返ったが、そこには相変わらず茶色い風景が広がっているだけだった。

「さっきから僕のをつけているのは誰だ？」

彼はまるで独りごとの様に呟いた。

「……………」

シャドウは遙か上空を見上げた。

澄んだ青空に様々な大きさの白雲が散らばっている。

スッ

シャドウは片腕をもう片方の肩の方に伸ばした。

ババババッ!!

シャドウの手に黄色い光が集まる。

ビュンッ!!

「カオススパア!!」

シャドウが遙か上空に向かって腕を振ると、その手から黄色い光の矢が勢いよく放たれた。

ドドドッ!!!

光の矢は何も無いはずの上空で何かに当たり爆発した。

空は灰色の煙に満ち溢れた。

「!?!」

徐々に煙が引いてきたところでシャドウは驚いた表情を見せた。

「……………ほう、俺に気づくとは……………流星だなシャドウ。」

煙の中から宙に浮遊する黒いハリネズミが現れた。

> i 3 7 4 8 2 — 4 5 7 1 <

「メフィレス……？いや違う。君は誰だ？何故僕を知っている？」

シャドウは黒いハリネズミに人差し指を向けながら尋ねた。

スッ

黒いハリネズミはゆっくりと下降し、地に降りた。

「……俺はダーク。ダーク・ザ・ヘッジホッグだ。この世で唯一の究極の存在だ。」

そしてゆっくりと告げた。

「……何だそれは。僕の真似のつもりか？」

シャドウは蔑むように言った。

「……いや、真似などでは無い。これから貴様を消し、俺が真の究極生命体になるのだから……」

「……何だと？」

シャドウは気にもとめるようなこともせず、静かに聞き返した。

「……貴様に手加減は要らないな。最初から全力でかからせてもらおう。」

スッ

ダークがゆっくり両腕をシャドウに向けた。

「……君が僕に何の用だが知らないが、今消されるわけにはいかない。」

こちらもこの究極の力 全力で行かせてもらっぞ。」

シャドウも身構えた。

10mほど離れた場所で対峙している二人の間に鋭い沈黙が走る。

ヒュオオオオオオオオオオッ!!

そして二人の間に一風の風が吹いた。

ドンッ！！！

二人は一気に力を開放した。

シャドウは神々しい金色に光り、ダークは禍々しい闇色に光った。

「ハアッ！！！」

ドンッ！！

ダークの両手から黒く巨大な閃光が放たれた。

バッ！

シャドウは大きく跳躍し閃光をかわした。

ドガ　　ン！！！！

閃光は地に突き刺さり、巨大な穴を開けた。

シュバッ！！

シャドウは宙で蹴りの体制をとると、ダークめがけて勢いよく急降下した。

ドガッ！！

鈍い音が響く。

「チッ！」

シャドウは舌打ちをした。

シャドウの重い一撃を、ダークは軽々と片腕のみで受け止めていた。

「無駄だ！」

バキッ！

ダークは無造作にその腕を振り、シャドウを弾き飛ばした。

ズザッ！

ドンッ！

シャドウは空中で体制を整えてから着地し、一気にダークに肉薄した。

ドガッ!!

シャドウがダークに回し蹴りをしたが、またしてもダークの腕にガードされてしまう。

「ハアアッ!!」

ドガアッ!!バキィッ!!ドゴオッ!!

シャドウはそのままダークに凄まじい速さで攻撃ラッシュを続けた。

しかし、全てガードされてしまう。

バッ!

「なにっ!?!」

シャドウがダークの顔めがけて手刀を放ったが、かわされた拳がその腕を掴まれた。

「タアッ!!」

シュバツ!!

ダークはシャドウを思い切り上空に投げ飛ばした。

「クッ！」

シャドウは再び宙で体制を整え、地上にいるはずのダークの方を見た。

「!？」

しかしそこにダークはいない。

「こっちだ。」

頭上で声がした。

「!？」

顔を上げたシャドウは自らの目を疑った。

そこに両腕を頭の後ろで組み、振り上げているダークがいたためである。

バキイツ！！

「ぐあつ！！」

ダークは両腕を振り下ろし、シャドウを地上に叩き落とした。

スタツ！

シャドウは無事に着地し、ダークを睨みつけた。

バツ！

「カオススピア！！」

ドドツ！！

シャドウは再び光の矢をつくり、ダークめがけて放った。
再度それは命中し、宙で爆発を起こした。

煙が引いてくると、防御体制でかまえているダークの姿が臙気にだ
が露になった。

そんなダークを、シャドウは静かに睨みつけていた。

「……今度はこっちから行かせてもらおう。」

ドンッ！！

ダークは空中から一気にシャドウに肉薄した。

「喰らえ！」

ダークはシャドウの顔にパンチした。

ガッ！！

シャドウはそれをガードした。

「まだまだだ。」

ババババババババツ！！！！

ダークは目にも見えぬ速さでシャドウに連続的にパンチをした。

ガガガガガガッ！！

シャドウは再び全てガードした。

「フッ、面白い。」

バツ！

ダークは一度シャドウから離れ、距離をとった。

「ハアッ！！」

二人は同時に叫び、一斉に肉薄した。

シュンッ！

そして二人が衝突する瞬間、双方の姿が消えた。

ドガンッ！！

虚空で大きな鈍い音が響く。

ドドドドドドッ！！！

鈍い音はその後数回に渡って響き、宙に衝撃波となっては消えた。

そう、二人が宙で打ち合っているのだ。肉眼では見えないほどの速さで。

音速を超えるそのスピードに姿を確認することが出来ない。

パッ！

再び二人の姿が現れると、互いに距離をとった。

スタッ！

二人は同じタイミングで着地した。

再び二人の間に沈黙が走る。

「……流石だな。だがこうでなくては面白くない。」

ダークが表情一つも変えず、静かに告げた。

「……」

シャドウは何も言わず、ただダークを睨んでいる。

「……一つ面白い物を見せてやるつ。」

スッ

ダークは静かに片腕を空に向けた。

「……?」

シャドウは空を見た。

遙か上空から何かが降りてくる。

その数は七つ。

「バカな……カオスエメラルドだと!？」

シャドウは叫んだ。

「……そう、カオスエメラルドだ。
こいつは俺の好きな様に動く……この様にな。」

スッ

ヒュッ!

ダークが腕をシャドウに向けると、カオスエメラルドの一つがシャドウに猛スピードで突っ込んだ。

「クッ!」

シャドウはギリギリでかわす。

「!?!」

その刹那、ダークがシャドウに肉薄した。

バキィッ！！

「ぐはぁっ！！」

そのままシャドウを殴り飛ばした。

ズザザアアッ！！

シャドウは地面に叩き付けられた。

「……………」

シャドウは立ち上がるが、再びカオスエメラルドがシャドウに襲いかかる。

「……………」

ダークは悠然としてシャドウに問いかけた。

「マスターエメラルドが盗まれた!？」

「ああ、何者かにな。」

驚き声を上げるソニックを尻目に、ナックルズは落ち着いた様子でそう言った。

「じゃあまずはマスターエメラルドを探すのが先だな。手掛かりは無いのか？」

ソニックの提案もむなしく

「無い。」

ナックルズは表情を変えずそう断言した。

「……hum。しょうがない、ちゃっちゃと探しに行くとするか。」

ソニックは呆れたように肩をすくめながら言った。

「俺も行く。今回の落度は俺にあるからな。」

ナックルズもばつが悪そうにソニックにそう言った。

「OK。Get ready……」

バッ

「gg……」

ダッ!!

ソニックとナックルズは勢いよく走り出した。

????????????????

ドガアッ!!

「グハアッ!!」

顔面に激痛が奔る。

ズザザザザアッ！！！！

そして地面に叩きつけられる。

もう何度奴の攻撃を受けたか

シャドウはよろよろ立ち上がりながら思っていた。

彼の体は既に傷だらけだった。

距離を取ろうとしてもダークは必ず先回りをしている。
逃げるつもりはなかったが、絶対に逃げられない状態だった。

ヒュッ！

そして再びカオスエメラルドが目の前に飛んでくる。

「くっ……………」

立っているだけでもやっとな状態で必死に避ける。

「ハアッ！」

そして再びダークが自分に向かって攻撃を仕掛けてくる。

ドガアッ！！！！

今度は腹部に激痛が奔る。

「ぐあっ！！！」

バツ！

吹っ飛ばされながら体制を整えたが、着地と同時に膝を付く。

「くっ……」

ぜえぜえと荒呼吸をしながら顔を上げる。

「！！！」

目の前で奴が

ダークが片腕をあげている。

ドンッ！！！

ダークが腕を振り落とすと同時に
なった。

目の前が真っ暗に

????????????????

「ヒュッ 絶景だねえ！」

ソニックは軽やかに走りながら、辺り一面に広がる茶色っぽい風景
を見回した。

「こんな所、初めて来たな……」

ナックルズも同じように走りながら、落ち着いた表情で独りごと。

「天気も良いし、最っ高だねえ」

ソニックは心なしか楽しげに見えた。

「お前なあ……それにしても、マスターエメラルドは一体どこにあるんだ……？」

ナックルズはそんなソニックの楽観的な様子に呆れつつ、周りを見渡していた。

キキッ!!

ドーン!!

「おわっ!?!」

ソニックが急に立ち止まったため、ナックルズはソニックに正面から激突してしまった。

「おいソニック!急に止まるな!」

ナツクルズは真っ赤になった鼻を押さえながらソニックに怒鳴った。

「……………なあ、あれシャドウじゃないか？」

ソニックが前方を指さしながら言った。

「あっ？」

ソニックが指差した方を見ると、遙か遠くに二つの黒い影が見えた。そのうち倒れている方の姿は、シャドウのように見える。

「……………大したこと無かったな……………シャドウ・ザ・ヘッジホッグ!!」
ダークは目の前に伏しているシャドウを見下ろし、蔑むように言った。

スッ

そして徐に片手を上げた。

ギユオオオオオオオ!!!!

その手に紫色の閃光が集まってくる。

その時だった。

「シャドウ!!?」

シューウウウウウウ……ン

ダークは徐々に力を弱めながら、突然掛けられた声の方へ振り返った。

そこにいるのは、青いハリネズミと赤いハリモグラ。

「……何だ貴様らは?」

ダークは腕を下ろしながら尋ねた。

「俺の名はソニック!ソニック・ザ・ヘッジホッグだ!」

ソニックはダークに鋭い眼差しを向けながらそう叫んだ。

「俺はナックルズ。」

ナックルズも同じようにダークを睨みつける。

「……俺の名はダーク。ダーク・ザ・ヘッジホッグだ。この世で唯一究極の存在だ。」

「What!？」

ソニックは思わず聞き返した。

（こいつ、シャドウに似ている……。）

その気高く重々しい物腰も他を圧倒する気迫も、シャドウを彷彿とさせるものであった。

「そして……エメラルドを操る者だ。」

「……………」

ソニックとナックルズの様子が一変し、驚いた面持ちに変わる。

「まさか、あの時カオスエメラルドの様子がおかしくなったのはお前の仕業か!？」

ソニックは尋ねた。

その言葉に、ダークは怪訝そうに首を傾げた。
そして少し前に見た景観を思い出し、不敵な笑を浮かべる。

そう、彼は見ていたのだ。

あの時 基地でのエッグマンとのあの一戦を 。

「……そうか貴様、どこかで見たことがあると思ったらあの時のハリネズミか。」

「……やっぱりお前の仕業なんだな!？」

ソニックの表情がより険しくなった。

「ああ、俺がやった。俺の能力の腕試しにな 。」

ダークはゆっくりと告げた。

「まさか、マスターエメラルドを盗んだのもお前か!？」

ナツクルズがそう尋ねると、ダークは曇った空を見上げながら呟くように言った。

「……………マスターエメラルドか、あれは俺にとって邪魔な存在だ。」

「だったらどうした!!」

ナツクルズは業を煮やしてそう叫んだ。

そんなナツクルズにダークは言い放つ。

「見つけ次第排除する。」

「なっ、なんだと!?!」

ナツクルズの様子が一変し、冷や汗が頬をつたった。

ザッ!

ソニックは一步前になると、ダークを指差し言い放った。

「エメラルドを止めるんだ!!!」

ダークは動じる様子もなく、不敵に囁いた。

「……止められるものなら、止めてみるがいい。」

スッ

ダークは戦闘体型に入りながら言った。

「ああ、分かったぜ！！ナックルズ、遅れるなよ！」

ソニックも身構えた。

「ああ。」

同じくナックルズも。

両者の間に数秒の沈黙が訪れる。

「Ready……………」

ソニックはまるで短距離走の選手のような構えをとった。

「GO!!!!!!!!!!」

ギョーンッ!!!!!!!!!!

ソニックは一気にダークに肉薄した。

「ハアアッ!!」

ドカアッ!

そのままダークに鋭い蹴りを放つ。

「甘いな!」

ガッ!

ダークは怯むことなくその足を掴んだ。

「なっ!?!」

「うおおおおおおお!!!!」

それに気づかないナックルズは一心にダークに向かって疾走している。

「ハッ!!」

ブンッ!!

ドガアッ!!

ダークはソニックをナックルズに向かって投げつけ、二人は弾き飛ばされた。

「「うわあッ!!」」

ズザアアア!!

「……………ッテテテ!!」

「遅い」

「!?!」

二人が顔を上げると、その上空にダークがいた。

「そ〜でもないみたいだぜ？」

ソニックがそう言った刹那、ナックルズは前方を見やった。

「んなつ！？」

ナックルズは目を疑った。

そこに片手をこちらに向けているダークがいたためである。

「…………消える」

ドンッ！！

ダークの手から黒い閃光が放たれた。

バツ！

「ハアツ！！」

当たる直前にソニックはナックルズを連れて跳躍し、閃光をかわす。

ドガ　　ン！！

閃光が地面に突き刺さり爆発を起こし、地に大きな穴を開けた。

「なかなかやるじゃん。」

ソニックは跳躍したままその穴を見、乾いた口笛を吹いた。

バツー！

「ソニック、上だ！！！」

ナックルズが叫んだ。

「おわっ！？」

ソニックは顔を上げ目を見開いた。
そこにダークが両腕を組み振り上げていたからである。

「ソニック！頭を下げる！！！」

「お、おいナックルズ！？」

ソニックが聞き返したが答える間がなかった。

「落ちろ！」

ガッ!!

ダークの言葉と共に腕が降り下ろされるが、ナックルズがその重い攻撃を自分の拳で受け止めていた。

「……………ほう」

ダークは驚いたように言った。

「く、くく……………!!」

しかし、ナックルズ表情からは限界が伝わってくる。

「おらあああああ!!…!!」

ドゴオツ!!…!!

ナックルズはそのままダークを弾き飛ばした。

ヒュウウウウウウ…

ドガ ……ン!!…!!…!!

ダークはガードしたがそのまま吹っ飛ばされ、背後にあった大きな岩に突っ込んだ。

スタツ！

ソニックとナックルズは地に着地した。

ドゴオオツ！！！！

それと同時にダークの突っ込んだ巨大な岩に亀裂が奔り、粉々に砕けちった。

「！！！」

二人は驚愕した。

その中から傷一つついていないダークがゆっくりと姿を現したからである。

「……なかなかやるな」

スッ

不気味に笑いながらゆっくりと地に舞い降りた。

ソニック達は咄嗟に身構えた。

「……………まずはお前だ」

ダークがソニックを睨みながら左右に大きく両手を開いた。

シュオオオオオツ！

その両手から黒い光が溢れ出、彼の頭上に集まる。

そしてそのまま小さな球体になった。

フオオツ！

球体がダークの片手の上に浮かぶ。

「くられ」

バツ！

ヒュン！！

ピタッ！

「！？」

ダークがその腕を振ると、球体がソニックに向かって目にとまらぬ速さで飛空した。

そしてそのままソニックの腹にくっついてしまう。

「な、なんだこれ！？」

ギギギギッ！！

球体を剥がそうともがくも、まるでとてつもない粘着力を持つスライムのように取ることが出来ない。

「くそっ取れない！」

どんなに力を込めても球体は全く剥がれる気配がない。
流石のソニックも焦燥に駆られた。

「チッ！ソニック、早めにケリをつけるぞ！」

ナックルズはそう言い、腕を振り上げながらダークへ突っ込んだ。

「うおおおおおっ！……！」

ドゴ　　ン！！

そのままナツクルズはダークの顔を渾身の力を込めて殴りつけた。手には確かな感触を感じた。しかし

「……なっ！？」

その一撃を受けても一向に動じず、それどころか悠然と彼に手を向けてくるダークに彼は驚嘆した。

（ば……バケモノか……）
驚きと恐怖が混じり合った混沌とした心持ちで、しかし彼は漠然とそう思った。

「邪魔だ」

その言葉と共に、ナツクルズに向けている掌に紫色の光が集まる。

ギュンッ！！

「ナツクルズ！！」

バッ！

「おわっ!?!」

ソニックが猛スピードで走ってきてナックルズの腕を掴み跳躍した。

カッ!!

下ではダークがさっきまでナックルズが居た場所に紫色の太い閃光を放っていた。

(あと少し遅れていたら)

そう思ったナックルズの額に汗が流れる。

ダークは空中の二人に冷たい眼差しを向け、呟いた。

「……ちよろちよるとすばしっこい奴め……」

「へへっ!それが俺だからな!」

ソニックは得意げに言った。

スッ

ダークは両手をソニックに向けた。

「なら、これはどうだ？」

シュオオオオ！！

ダークの周りに黒煙が集まってくる。

ジャキツ！！

そしてそれは硬化し何本もの黒い剣へと姿を変えた。

バツ！！

ダークの腕が降り下ろされると同時に剣が一齐にソニック達に襲いかかる。

「Here we go！！」

ヒュンッ！ヒュンッ！ヒュンッ！

ソニックは空中を移動し、剣を次々と避けて行った。

「へへっ、どんなもんだい！」

ギョーンッ！

そのままソニックはダークに向かって猛スピードで突っ込んだ。

ドゴオンッ！！！

鈍い音が響き、ダークの体が吹っ飛ばされる。

「チッ！」

ダークが舌打ちをし、空中で体制を整えようとした時

「でえりゃああっ！！！！」

「なにっ！？」

ドゴーーーーン！！！！

「ぐっ！」

いつの間にか先回りをしていたナックルズに殴り飛ばされ、再びソニックのもとに飛ばされる。

「行くぜ！」

キュイイイイイン！！！！

ソニックが勢いよく回転をし、

「ハアッ!」

ドガアッ!!

そのまま回転の力を利用し、鋭い一蹴でダークを地面に叩き落とす。

ドガーーーーン!!

ダークは勢いよく墜落した。

ババッ!

すぐさまダークは立ちあがり体制を整えた。

ギロツ!

ソニックを睨むかと思わせたその刹那

「……………くっくっく、ハッハッハッハ!!!!!」

突如高笑いをした。

「な、何を笑ってやがる!？」

ナックルズはダークを睨みながら叫んだ。

「……気づかないのか?あのハリネズミの異変に。」

ダークはナックルズに一瞥を投げかけながら、可笑しくて仕方ないように言った。

「なんだと!？」

その言葉を聞くや否や、ナックルズはソニックを見た。

ドサツ!!

ナックルズは絶句した。

ナックルズの視線を受けたソニックが力なく地面に落下したためである。

「お、おいソニック!!」

バツ!

ナックルズは慌ててソニックに駆け寄った。

「おい!どうしたんだよ!?!ソニック!?!!」

ナックルズはソニックの体を揺さぶるも、彼に何ら反応はなかった。ただ虚ろな眼差しを虚しく宙に投げかけていることを除いては。

そう、その姿はまるで電池の抜けたからくり人形のようなだった。

"Two Heroes” VS "ULTIMATE”

更新遅れました(汗) すいませんm(____) mあと1つお知らせです。

活動報告にも書きましたが、作者は現在テスト期間のため更新が1

2月中旬まで遅くなるかもしれませぬ(´; ;´)

誠に申し訳ありませんorz

BATTLE AGAIN (前書き)

皆さんお久しぶりです、(＊、、)ノ
テスト終わったので久しぶりの投稿です

BATTLE AGAIN

「……………」

暗闇の中、彼は静かに何かを感じた。

（ ……「」…「」……は……？）

彼は微かに目を開けた。

目の前に広がるのは茶色い荒野。

「 ……！！ ……！！ ……！！ 」

周りが何やら騒がしい。

彼は騒がしい方にゆっくりと視線を向けた。

????????????

「ソニック！……ソニック！……！」

ナックルズはソニックの体を揺さぶりながら叫び続ける。

しかしソニックは何らかの反応をすることはなかった。

「クッククック……」

ダークは静かに、そして不気味に笑う。

キッ

ナックルズはダークを睨みつけた。

「何を笑ってやがる！？ソニックに何をした！！？」

ナックルズの噛み付くばかりの怒声にも怯むことなく、ダークは平然と言つてのけた。

「……何をしたかつて？そいつの腹を見てみな。」

「なにつ！？」

ナックルズはソニックの腹部へと視線を落とした。

「……まさか、これが原因か!？」

ナツクルズはダークが先ほどソニックの腹部に付着させた黒い球体を見ながら聞き返す。

「そう、そいつだ……」

スッ

ダークが徐に手を上げると

先程までどんなに力をいれても取れなかったあの球体が嘘のように簡単に取れ、ダークに向かってゆっくりと浮遊していく。

フッ

そしてダークの手の上で動きを止めた。

そのまま球体はカオスエメラルドにそっくりな形状の黒いエメラルドに姿を変えた。

「……こいつを使ってそのハリネズミの魂を封じ込ませてもらった。」

ダークはエメラルドを掴みながら悠然と告げる。

「っな!？」

ナックルズは耳を疑った。

「……それにしても、魂を封じ込ませるのにこんなに時間がかかるとは随分と「大きい」魂を持っているな。」

ダークは地に倒れているソニックに冷たく一瞥を投げる。

「……っつーことはそのエメラルドを壊せば、ソニックの魂は開放されるんだな？」

ナックルズはエメラルドを睨みつけながら尋ねる。

「ハッ！俺に傷一つすら付けられない貴様が俺からエメラルドを奪えるとも思っているのか?!」

ダークはエメラルドを掴んでいる腕を組み、嘲るように聞き返す。

「つく！馬鹿にするなあ!!」

ダッ!!

ナックルズはダークに向かって走りだす。

「うおおおおおおおおお!!!!」

目前に迫ったダーク目がけて拳を振り下ろした。

ドゴオオオオン!!!!

地面に大きく亀裂が奔る。

しかしそこにダークの姿は無かった。

「んなつ!?!」

ナツクルズは地面から腕を引き抜くと辺りを見渡す。

しかし、ダークは見あたらない。

「後ろだ。」

「!?!」

背後から声がし、ナツクルズは振り返る。

バキィッ!!!!

姿を確認するより先にダークの一蹴を喰らい吹っ飛ばされる。

「ぐあッ!」

ズザザザザアッ!!!!

「くっ……!!」

痛みに顔を歪ませながらナツクルズは立ち上がり、ダークを睨みつける。

「貴様如きが俺にかなうと思っているのか？」

ダークは不敵に告げる。

「ち……くしょう……！！」

ナックルズは悔しさに満ちた顔でギリギリと歯ぎしりをする。

「……まあいい。お前を消してからこのハリネズミも消してやる。」

スッ

ダークは静かに片手をナックルズに向ける。

バババババババババツ！！！！

その手に黒い閃光が集まる。

「消える！」

(ま……マズい……！！)

ダークが叫ぶと同時にナックルズは身構えた。

その時だった。

「カオススピアー!!」

ドガン!!

「グツ!?!」

突如ダークに光の矢が当たり炸裂する。

「なっ!?!」

ナックルズは呆然としてゆっくりと周りを見渡す。

「……………」

ギロツ!

ダークは静かに矢の飛んできた方向を睨みつける。

「ハア……………ハア……………」

そこに若干息の荒いシャドウが立っていた。

その刹那、シャドウが真紅のオーラをまとった。その足元からはまるで世界が揺れているような大きな振動が伝わってくる。

「……僕を舐めるのもいい加減にするんだな。」

シャドウは少し怒った面持ちを見せながら告げる。

「わっ、わわわー!!」

ナックルズは揺れで立っていらなかった。

「それで俺を脅しているつもりか？ 忘れたなら思い出させてやるが、貴様は

この俺に一度負けている。それでも俺に勝つと言つつもりか？」

クックックと笑いながらダークはシャドウに言い放つ。

シャドウはフンと鼻を鳴らした。

「……がっかりさせるようで悪いが、僕はまだ全力を出し切っていない。あれで勝った気になるのは早いというわけだ。」

その言葉にダークは表情を一変させる。

「……ほう、なら見せてもらおうか。貴様の全力の力とやらを……」

「……何の真似だ？」

ダークは静かに尋ねる。

「僕の両手首に付けている力のリミッターを解除させてもらった。」

シャツ！！

そう告げた瞬間シャドウの姿が消える。

「なにつ！？」

ダークは周りを見回す。

「カオススパア！！」

シャドウの声だけが聞こえるが姿が見えなかった。

「なつ！？」

しかしそんなことに気を取られる間はなかった。

数え切れないほど膨大な光の矢がダークを取り囲んでいたからである。

「くっ！！」

そう呟いた瞬間、背中に衝撃が奔る。

「ここだ。」

その正体は金色のオーラをまとうシャドウの鋭い蹴りだった。

ギューウウウ

ン！！！！！

足を離さないままシャドウはダークを下敷きにして地に急降下する。

「ぐ、ぐぐぐぐぐ……！！」

ダークは脱出を試みるが強大な力で地面に引っ張られるようで脱出できない。

「ハアツ！！」

ドガーーーーーン！！！！！！

シャドウはダークを地に叩きつけた。

「くっ！」

バツ！！

ダークはすぐさま立ち上がり受身の体勢をとった。

「……」

ダークは苦々しく舌打ちをした。

（ さっきまでのシャドウとはまるで別人だ…一体どうなっている？ ）

俄かには理解できないほどシャドウの力は格段に上がっていた。

「さっきまでの君達の話は聞かせてもらった。」

シャドウはそのままダークに告げた。

「……何の話だ？」

ダークは白々しく聞き返す。

スッ

シャドウは自分の手の上に何か黒い物体を取り出した。

「 貴様、いつそれを！？」

ダークは驚いた表情を見せながらも静かに尋ねる。

「先程空中でいただいた。こんなものでソニックの魂を封印していたとはな……」

シャドウが持っていたのはソニックの魂が封印されている黒いエメラルドだった。

ドンッ！！

「それを返してもらおうかあっ！！！！」

シャドウに肉薄しながらダークは叫ぶ。

バツ！

シャドウは大きく跳躍した。

ギョオオッ！

ダークはそのままシャドウを追う。

ギョーンッ！

かなり高くまで跳躍したところでシャドウは金色のオーラをまといつながら急降下した。

「なっ!?!」

突然のことでダークは避けることが出来ない。

ドガッ!!

そしてそのままシャドウはダークを蹴り飛ばした。

「ぐあっ!」

ヒュウウウウ

ドーーーーーン!!

ダークは遠くの巨大な岩に突っ込んだ。

一方シャドウはそんなダークに見向きもせず急降下しながら地を見た。

「フッ」

バツ！

シャドウは持つていたエメラルドを地に投げつけた。
勢いよく地面に落ちたがエメラルドにはヒビ一つ入らない。

「ハアアツ！！」

シャドウはエメラルドめがけて自らの落下スピードをさらに上げた。

パキイイインツ！！！！

シャドウがその上に着地すると共にエメラルドは割れた。

ポウツ！

粉々に砕け散ったエメラルドの破片の隙間から青い球体の様なものが抜ける。

そしてそのまま地に力なく倒れているソニックの中に入っていった。

「う……あ……？」

ソニックの目に生気が戻る。

「ソニック！！？」

ナックルズはソニックに駆け寄った。

「ナ……ナックルズ……？……一体どうなってんだ……？」

ソニックは立ち上がりながら尋ねる。

「シャドウが助けてくれたのさ。」

ナックルズが指さした方を見ると手首にリミッターをはめ直しているシャドウが立っていた。

「……そうか。THANKSシャドウ！」

ソニックはシャドウに親指を立てる。

シャドウは何も言わずフンと鼻を鳴らした。

しかし、誰もが少なからず安堵したその刹那
ドガーーーーン！……！

「！？」

突如遠くの岩盤が割れ全員がそちらを振り返る。

シューウウウウウウ……

中からダークが現れた。

あれだけシャドウのラッシュを受けたのに傷一つ付けることなく。

咄嗟に全員が身構える。

「……チツ、奴が復活したか。」

ダークはそのまま上昇した。

「……まあまだチャンスはある。今回は見逃してやろう。次会った時が貴様らの最後だ。」

ダークはそう言い残すと、音も無く姿を消した。

RAPID RUSH

「……ダーク……奴は一体……？」

シャドウは呟いた。

「なあシャドウ、あいつ一体誰なんだ？」

ソニックはシャドウに尋ねた。

「彼に見覚えはない。」

シャドウは腕を組みながら答えた。

「で、お前はその後どうするんだ？」

ソニックが再び尋ねかける。

「……彼からカオスエメラルドを取り戻すためにマスターエメラルドを探す。」

「Hun!? マスターエメラルドが盗まれたことを知ってるのか？」

ソニックは驚いた様子で聞き返した。

「そういえばお前にはまだ話してなかったなソニック。」

ナックルズは頭を掻きながら話を続けた。

「何をだ？」

ソニックはナックルズの方に向き直りながら尋ねる。

「実はお前が来る前にシャドウがマスターエメラルドのことを聞きに来たんだ。」

「What!？」

ソニックは驚きの表情を見せる。

「ってことはシャドウ、お前あの時俺達の戦いを見てたのか!？」

「……カオスエメラルドを奪うチャンスをつかっていた。」

シャドウは二人に背を向けながら答えた。

「……ま、どっちにしろ今の俺達の目的は同じってわけだな。」

ソニックは少し表情を和らげた。

「喜んでいる場合じゃないぜソニック。一刻も早くマスターエメラ

ルドを見つけないと
ダークに消されちまう！」

ナックルズは少し慌てた様子で言う。

「ここに居ても仕方が無い。一度マスターエメラルドのあった所へ
戻ろう。何か手掛かりが
見つかるかもしれないしな。L e t ' s m o v e o n ! ! 」

ダッ!!

言うが早いが三人は駆け出した。

????????????????

ザッザッザッザッザッ

広い草原を「彼」は1人歩き続ける。

「……………つく。」

だが、既に体は傷だらけだった。

「どうなってやがる……………」

「彼」は呟いた。

俺は誰だ？

何であんな所に倒れていたんだ？

何でこんなにボロボロになっているんだ？

「こっはどこなんだ？

これらの思いが彼の頭を駆け巡る。

ズキンッ！！！！

「うっ！！！！！！」

ガクッ

頭に激痛が奔り、「彼」は思わず膝をつく。

「 ハア ハア 」

動く度に体に激痛が奔る状態でも無理矢理体を立てる。

「……こんな……ところで……死んで……たまるか……」

ザッザッザッザッザッ

目の前が霞んでよく見えないが、それでも「彼」は歩き続ける。

一体何が「彼」をこんなにも突き動かしているのだろうか？

????????????

「ここがマスターエメラルドのあった場所か？」

ソニックは目の前にある台座のような物を見つめながら尋ねた。

「ああ。俺はここで守っていたんだ。」

ナックルズは目を細め、咳くようにその問いに応じた。

（クソッー体どこに行っちゃったんだ……）
その強ばった表情からは怒りとも悔恨ともとれる感情が伝わってくる。

ここはソニックがカオスエメラルドの襲撃を受けた後にナックルズを訪ねてやって来た森の中だった。

ソニックは周りを見回す。

「……どうやらこの辺りには手掛かりは無さそうだな。シャドウ、何か分かるか？」

そして背後で木に寄りかかって腕を組んでいるシャドウに尋ねた。

「……………」

しかしシャドウは目を閉じたまま何も言わなかった。

ソニックはため息をついた。

「くそっ、何処行っちゃまったんだ……!!」

ギリッ

ナックルズは少し苛立った面持ちで齒軋りをした。

その時

ガサッ!

背後で草を分ける音がし、全員が振り返った。

「誰だ!?!」

ナックルズは思わず身構える。

中から現れたのは

「「テイルス!!?」」

少しボロボロのテイルスだった。

「ソニック! ナックルズ! シャドウも!」

テイルスは少しだけ笑顔を見せながら嬉しそうに言った。

「テイルス! お前……どうやってあそこから!?」

ソニックは少し驚いたように、だが嬉しそうにそう尋ねた。

「あの時はボクももう駄目かと思ったよ。けど墜落する直前で我に帰って非常用ボタンを押して脱出したんだ。ところで何かあったの? 何だか皆慌ててるみたいだけど……」

テイルスはソニック達に尋ねる。

ソニックはこれまでの経緯を全てテイルスに話した。

「ダーク」の存在のこと

カオスエメラルドがそのダークに操られていること

マスターエメラルドが盗まれてしまったこと

その一部始終を聞くとティルスは腕を組み考え込んだ。

「うーん……確かに急いでマスターエメラルドを探さないかね。」

ティルスは真剣な表情でソニックに告げる。

「何か良いアイデアは無いか？」

ソニックがそう尋ねると、ティルスは少し思案顔で提案した。

「マスターエメラルドはエネルギー反応が強いからレーダーで探すのはどうかな？」

「Good idea!!」

ソニックは親指を立てる。

しかしティルスは再び真剣な表情になる。

「……ただ、今からボク1人で作ったんじゃ間に合わないかも……材料も足りるか分からないし……」

その言葉にソニックも真剣な顔になる。

「その隙にダークに見つかったらアウトってわけだな。」

ソニックは腕を組む。

「……けど、方法が全く無いってわけでもないんだ。」

それまで沈黙を守っていたナックルズもその言葉に少なからず反応し、ソニックの隣で

ティルスの次の言葉を待った。

「……エッグマンの手を借りる。」

少し顔をしかめてティルスは告げた。

「「!!」」

その言葉にソニックとナックルズもつられて顔をしかめた。

「……多分そうするのが一番早いと思うんだ。」

嫌だけどね…… そう言いたげにティルスは続けた。

「あのドクターがそう簡単に手を貸してくれるとは思えないがな。」

ずっと黙っていたシャドウが初めて口を開いた。

「うん……でも今の所これしか方法が無いんだ。」

ティルスはちょっと困った面持ちに変わり、ポリポリと頭を掻いた。

「……悔しいが俺もそう思う。今回ばかりは奴に頼るしかない。」
ナツクルズも嫌そうな面持ちで言った。

「ま、奴にとつちや世界征服に邪魔な奴が現れたんだから協力してくれんじやないの〜?」

ソニックはのん気な表情を見せながら言った。

「それはあるかもね。」

ティルスも笑いながら答える。

「とにかくそうと決まれば早速エッグマンの所へ行こうぜ! Let's move on!」

ダッ!

四人は駆け出した。

????????????????

「……」

ナックルズは目の前の大きな扉を見上げて呟く。

「……………ったく、もう新しい基地を作ってたのか。あのヒゲのオッサン一体何個基地作ってたんだか……………」

ソニックは呆れたように言う。

「とにかく、ドクターの居るところに急ぐぞ。」

シャドウの声を合図にソニックたちは歩き出す。

ギギギギギギ……………

大きく重い扉をゆっくりと開く。

「……………うん、誰もいないよ。」

中を少しだけ覗き込んだティルスが言った。

その言葉通り、扉の向こうには薄暗く人気がない通路が横たわっているだけだった。

「よし、行こう。」

ナックルズがそう告げた瞬間

ビ

ッビ

ッビ

ッ……………!!

突然けたたましく警報音が鳴り響く。

「うわぁっ!?!」

テイルスは驚き飛び上がった。
ソニックとナックルズも咄嗟に警戒する体勢をとった。

「侵入者じゃ!!侵入者を排除するのじゃ
!!」

エッグマンの声が響き渡った。

『シンニユウシャ!!シンニユウシャ!!』

ドドドドドドドドドドッ!!!!

そして奥から数え切れない数のエッグマンに似せた赤いロボットが走ってくる。

「こっつなると思ったぜ!」

手袋をはめ直しながらソニックは叫ぶ。

「皆気を付けて!来るよ!」

テイルスは構えた。

「こっとなつたら強行突破だ！まとめてぶっ壊してやるぜ！！」
拳を鳴らしながらナックルズも叫ぶ。

「チツ、ガラクタ共が……僕の邪魔をするなっ！！」
唯一全く動じていなかったシャドウもそこで沈黙を破った。

「It's show time！！」

バツ！

ソニックの声と共にソニックとシャドウが猛スピードでロボットの群れに突っ込む。

「ハアアアッ！！」

バババババババツ！

二人の突っ込んだところから大量のロボットが吹き飛ばされている。

「オラオラオラアッ！！」

ナックルズはその後から続き吹っ飛ばされたロボットを更に追撃す

る。

「えーいーいー!」

ドオンッ!ー!ドオンッ!ー!ー!

テイルスはどこから取り出した銃を腕に装着し、ロボットを砲撃していく。

「皆!この調子でガンガン行くぜ!」

ソニックはそう言いながらロボットを吹き飛ばしていく。

その頃

「ええい、警備ロボ達は一体何をやっておるのじゃ!?!」

エッグマンは司令室で大きなモニターの下でキーボードを叩いていた。

ブウンッ！

画面に監視カメラの映像が映る。

「なっ、ナヌ！？」

エッグマンは驚愕した。

画面に映されたのはロボット達の残骸。

「クソー！一体誰の仕業じゃあ！？」

エッグマンはキーボードを力任せに叩く。

その時

ドガァン！！！！

司令室の入り口で爆発が起こる。

「むうっ！？」

その轟音に思わず振り向くと、

「よおエッグマン。」

爆発の中から姿を現したのは

JOIN FORCES

「ソ、ソニック!？」

その正体は言うまでもなくソニックだった。

ザッ

エッグマンがその名を呼んだのと同時にソニックの周りにその仲間達が　　テイルス、ナックルズ、シャドウが姿を現す。

エッグマンは立ち上がった。

「な…ななな…なんじゃ貴様ら!？ワシはまだ何もしとらんぞ!」

エッグマンは後ずさりをしながらそう叫んだ。

「エッグマン、頼みがある。」

「むうつ!？」

ナックルズという言葉にエッグマンは足を止める。

「僕達に協力して欲しいんだ。」

続けてテイルスが言う。

「協力じゃと？」

エッグマンは思わぬ申し出に眉を吊り上げる。

ソニックは先程テイルスに話したようにエッグマンに事情を説明した。

「ダーク」の存在のこと

カオスエメラルドがそのダークに操られていること

マスターエメラルドが盗まれてしまったこと

一部始終を聞くと、エッグマンはソニック達に背を向ける。

「……フン、ワシの基地を目茶苦茶にした貴様らの頼みなど……」

「ドクター、今回の敵はかなりの強敵だ。目的も定かではないが、ドクターの世界征服の邪魔をすることは恐らくほぼ間違いない。奴を討つにはドクターの手を借りる他無い。」

シャドウの言葉にエッグマンは動きを止める。

「……で、貴様等の要求は何じゃ？」

エッグマンは背を向けたまま尋ねる。

「マスターエメラルドを探さなきゃいけないからレーダーを作りたいんだ。」

ティルスが代わりに答える。

「……ティルスよ、来るのじゃ。」

プシュ　　ッ！

そう言うとエッグマンは先程ソニックが破壊したのと反対方向にある自動ドアから司令室を出た。

「皆、ちょっと行って来るね。」

ティルスはそう言い残すとエッグマンの後に続き司令室を出た。

????????????

ちょうどその頃　　ソニック達の居場所から遙か彼方に

「ククク……」

何か可笑しいのか「彼」は急に笑い出す。

「……奴ら、今頃何をしているか……これを探し出すために必死になっているか……」

「彼」は独り呟く。

「……せいぜい必死になるがいい……見つけた所でどうにもならないのだから……」

クックックと笑いながらそう呟く「彼」の背後は、何やら輝いていた。

????????????????

(……遅い……)

苛ついた心情でナツクルズはトントン指を動かす。

もう何時間待たされたことか…… とナツクルズは思う。

「……」

シャドウは静かに壁に寄りかかり、目を閉じている。

「……」

ソニックも壁際に座って足を組み、目を閉じている。

長い沈黙が続く

その時だった

プシュ　　！

ドアが開き、全員が振り返る。

「お待たせ！」

テイルスが何か丸い物を持ち部屋に戻ってきた。

「随分遅かったな。」

ソニックは立ち上がりながら言う。

「ごめんね。結構作るのが大変で……」

テイルスは少し申し訳なさそうに言う。

「でも、完成したんだよ！」

そして、手に持っていた丸い物を見せる。

「これがそのリーダーか？」

ナックルズが尋ねる。

「そうじゃ。」

少し遅れて入ってきたエッグマンが代わりに答える。

「それを使えばマスターエメラルドがどこにあるか分かるじゃろつ。使い方はテイルスに教えてある。」

「Thanksエッグマン！」

ソニックはエッグマンに親指を立てる。

「一刻も早くダークとやらを倒すのじゃぞ。そいつが居る限りワシの世界征服は出来そうになさそうじゃからな。」

エッグマンは顔をしかめて苦々しく言う。

「分かってるつて。さて、早速行くか！Here we go！」

ダッ！

ソニックのかけ声と共に四人は走り出す。

「……………」

一人残されたエッグマンは考え込んだ。

「……………ダーク・ザ・ヘッジホッグ……………どこかで聞いたことのある名

「じゃな……じゃが

どこで聞いたかが思い出せん……」

????????????????

ソニック達がエッグマンの基地から出ると同時にソニックはテイルスを振り返る。

「で、何処へ行けばいいんだ？」

「えつとね……」

ピッ！

テイルスはレーダーを起動させる。

ピッピッピッピッピッ！

「……レーダーによるとここから北に約100km位行った所だけど……ソニックなら大した事無い距離だね！」

「Of course!」

ソニックは余裕たつぷりに告げる。

「グズグズしている時間は無い。さっさと行くぞ。」

シャドウは冷静に言った。

「OK。皆遅れるなよ！READY……………GO!!」

ダッ!!

四人は走り出す。

????????????????

大分走ったが、溪谷に着くと四人は足を止める。

「後どの位だ？テイルス。」

ナツクルズが尋ねる。

「レーダーによるとこの辺りなんだけど……………」

その言葉に反応してナツクルズは周りを見渡す。

「……………お、おい！あれ！」

ナツクルズはまっすぐ先を指差した。

少し離れた場所にマスターエメラルドがあった。

「あ！あったあ！」

テイルスも嬉しそうに叫ぶ。

ダッ！

ナックルズはマスターエメラルドに向かって駆け出した。

「良かった〜！これでカオスエメラルドを止められるね！」

テイルスが笑顔でソニックを振り返った。

「ああ！もうダークの好きにはさせないぜ！」

ソニックも微笑みながら答えた。

その時だった

ガンッ！！！！！！

「！？」

いきなりガラスに物が当たったような鈍い音がしてソニックとテイルスは音がする方を見た。

「……………」

そこでナックルズが何も無さそうな所でまるで壁に猛スピードで激突したようなポーズをとっていた。

ズルズルズル……

ポテッ

そしてそのまま力なく地に崩れ落ちた。

「……お、おいナックルズ！大丈夫か！？」

一瞬呆気にとられていたソニックはナックルズに声をかけた。

「……ッテテテ」

ナックルズは鼻を押さえながら顔を上げた。

「な、何だこれ？」

ナックルズは透明な壁らしき物に手を当てる。

「なんだろう……？透明なバリアーかな？」

テイルスも同じようにそれに触りながら首を傾げる。

「どうやら、マスターエメラルド全体を囲っているみたいだぜ！」

いつの間にか向こう側へ回っていたソニックが言った。

「……壁があるなら壊せばいい。」

シャドウが口を開き、ゆっくりとマスターエメラルドに近づく。

「お、おい……」

テイルスとナックルズは少し後ろに下がった。

スッ

そしてゆっくりと片腕をもう片方の腕の方に伸ばす。

ババババババババババツ!!!

そしてその腕に黄色い光が集まる。

「カオススピア!!!」

バツ!

シャドウが腕を振ると黄色い光の矢が数本マスターエメラルドに向かって飛んでいく。

ドガア

ン！！

そしてそのまま爆発を起こす。

シューウウウウ

マスターエメラルドが余すところなく灰色の煙に包まれた。

煙が徐々に引いていくが

「……………」

シャドウは腕を組み何も言わずにその光景を見ていた。

中からはさつきと変わらず美しい光を放ちながら輝くマスターエメラルドが姿を現した。

しかしナックルズがそれに近づこうとするも、やはりまだ壁が存在していた。

「……………駄目か。」

シャドウは舌打ちをした。

「……………クックック」

「……………?!?!?!?」

その瞬間、不気味な笑い声が響いた。全員が咄嗟に構える。

「その声……ダークか!？」

シャドウは叫ぶ。

シューウウウウウウウウウウウウウウ!!!

その瞬間、マスターエメラルドの上空に禍々しい闇色の煙が集まる。

そしてそのまま煙は奴の「ダーク」の姿となった。

「……その通りだシャドウ。マスターエメラルドを手に入れるために必死のようだな。」

ダークはシャドウを見下ろしながら静かに告げる。

「失せろ!カオススパア!!!」

ババツ!!!

シャドウはダークめがけて再び光の矢を放つ。

ドガァン!!!

「チッ！」

しかし、透明な壁が邪魔をしてダークに当たらない。

「ククク、まあそう焦るな。これから貴様達に最高のショーを見せてやろうと思つてな。」

「あいにく、お前の暗いショーなんか見たくないんでね！」

ダークの言葉にソニックが言い返す。

「……まあそういふな。まずは客席に座ってもらわないとな。」

スッ

ダークが手を天に向ける。

スウウウウウウッ！！

するとその掌に黒い光が集まる。

「ハアッ！！！」

ドンッ！！

ダークが叫ぶと共に、掌から複数の黒い物体が飛び出す。

ギユウウツ!!

「なっ!?!」

その黒い物体はソニック、シャドウ、テイルス、ナックルズのそれぞれに向かって飛んで行き、ロープ状になってソニック達に巻きつく。

「し、しまった!」

ギギギギギギギツ!!

ソニックは必死に振り解こうとするが、物凄い力で巻きついてくるこの黒い物体を外すことが出来なかった。

「くっ!」

「んくく!!!」

ソニックだけでなく、テイルス、ナックルズ、シャドウも同じ状態だった。

「ち、ちつくしょう!! やっぱリマスターエメラルドを盗んだのはてめえだったんだな!!!!」

ナックルズはダークに向かって怒鳴る。

「……ああ。あそこで言ったらつまらないと思ってな。」

クックックと笑いながらダークは答える。

フッ

ダークはゆっくりとマスターエメラルドの上に舞い降りる。

「……さあ、ショーの始まりだ。」

そしてゆっくりと告げる。

「っな!? マスターエメラルドをどうする気だ!!!?」

ナックルズは叫ぶことしか出来ない。

「……言っただろう? 『見つけ次第排除する』ってな……」

「!?!?!?!」

ナックルズは恐怖の面持ちになった。

スッ

ダークはゆっくりと片手を振り上げる。

「やめろおおおおおおお!!?!?!?!?!?!」

ソニックの言葉にナックルズは一瞬考え込む。

「　　そうか、そうだったな。すまんソニック。少し取り乱したようだ。」

「Don't worry!」

ソニックはウィンクした。

「クツクツク　　」

そんな二人の会話を聞き、ダークは静かに笑う。

「　　欠片を探しても無駄だぞ。」

「「!?!」」

二人はダークを振り返る。

「　　マスターエメラルドは壊れても欠片を集めれば元に戻る。それを俺が知らないとも思ってたのか?」

ダークは不敵に笑う。

「何で欠片を探しても無駄なんだ?」

ソニックが尋ねる。

その刹那、ダークが両手を広げる。

フオオオオオオツッ！

そして、ダークの体に闇色のオーラがまとわりつく。

「ハアツッ！！」

バババババツッ！！

ダークが叫ぶと共にダークの体から再び複数の黒い物体が飛び出し、それぞれ別方向に飛び去っていった。

「……………」

ナックルズは何が起こったかよく分からない顔をしている。

「……………」今、欠片が飛び散ったところに俺が生み出した欠片の守護者を送った。

欠片に近づく者全てを排除する危険な存在を、な。」

「なっ！！」

「……まあ、今からここで消滅する貴様達にとっては意味の無い話
だがな……」

「何だつて!？」

ティルスが叫ぶ。

スッ

ダークが徐に手を天に向ける。

「……?」

ソニック達は天を見上げた。

「なっ!？」

「そんな!？」

ソニック達は愕然とする。

「クッククク……これが何だか分かるよな?」

「カオスエメラルド!？」

そう、ダークの手に舞い降りたのは

異様な光を発する七つ

の caos エメラルド。

「くそっ！てめえ卑怯だぞ！！」

ナックルズはロープ上の黒い物体を振り解こうともがく。

「おのれ！」

シャドウも同じようにもがく。

ソニックとテイルスも同じ状態だった。

「貴様らまとめて消えるがいい！！」

ダークがゆっくりり手を動かすと、caos エメラルドが凝結していく。

バツ！！

ギョオオオツ！！

ダークが腕を振り下ろすと同時に凝結したcaos エメラルドが身動きの出来ないソニック達に襲いかかる。

(やっ、ヤバい！！)

ソニックは必死にもがく。

その時だった

コオオオオオツ！

カオスエメラルドが青白い光を放ちながら動きを止めた。

「なにいつ！？」

ダークは目を疑う。

「久しぶりだな！ダーク！」

空から声が聞こえ、ダークは空を見上げる。

そこに居たのは

LEFT RIDDLE

「シルバー！？」

ソニックは驚いて声を上げた。

そこに居たのは浮遊しながらカオスエメラルドに向かって両手を伸ばしている銀色のハリネズミ　　シルバー・ザ・ヘッジホッグ
だった。

「お前ら、久しぶりだな！」

シルバーは微かにソニック達に笑みを浮かべる。

「チィ、小癩な！」

グググググ……！！

ダークは腕に力を入れる。

シルバーはダークの方に顔を向ける。

「いくら力をいれても無駄だぜ！俺の超能力を舐めるなって言った

のを忘れたのか？」

シルバーは余裕たっぷりと言う。

「…………おのれ…………!!」

ダークは怒りに顔を歪める。

「どうしたダーク？お前の力はそんな程度なのか？」

シルバーは叫んだ。

ニイツ！

しかしダークは表情を一変させ不気味な笑顔を浮かべる。

バツ！

そして跳躍し一気にシルバーに肉薄する。

「なっ!?!」

「調子に乗るな。」

バキィツ!!!!!!

「うあっ！ー！」

ダークは目にもとまらぬスピードで腕を頭の後ろに組みシルバーを地へと叩き落とす。

ヒュウウウウウウ

……

ドガ

ン！ー！ー！

物凄い勢いでシルバーは地へ落下する。

「シルバー！ー！」

ソニックは叫ぶ。

シルバーの落下したところに大きな穴が開き、中がどうなっているか分からない。

ダークは上空からその様子を何も言わずに見ている。

スッ

そして彼の周りに再びカオスエメラルドが集まる。

「雑魚が……」

そして冷徹に言う。

その時だった

フッ

「……!?」「……」

突如ソニック達は体が軽くなるのを感じた。

「何っ!?!」

ダークは驚愕した。

「あれ? 僕たち動けるよ!」

テイルスは嬉しそうに飛び跳ねる。

ソニック達に巻き付いていたあの頑丈な黒い物体が青白く光り浮遊していく。

「……まだ終わっちゃいないさ。」

シルバーが片手を上げながら穴の中から上昇してくる。

そして青白く光る黒い物体がシルバーの周りに集まる。

「喰らえ!!」

ブンッ!

シルバーが腕を振ると同時に黒い物体が一斉にダークに向かって飛んでいく。

「……愚かな。」

しかしダークは動じなかった。

フシユンッ!!

「っな!?!」

黒い物体がダークに当たる瞬間、黒い物体が消えた。

「……こいつは元々俺の体から作った物体。返してくれて感謝するぜ。」

ダークはクッククックと笑いながらソニック達を見下ろす。

「くっ！」

シルバーはゆっくりと降下し、着地する。

「くそっ、どこまでも卑劣な奴め！」

ナックルズが叫ぶ。

「……卑劣？こっちは一人なのに仲間と組んででかってくる貴様らの方が卑劣ではないか？」

「！！……くっ！」

ナックルズは歯軋りをする。

「仲間と組んだこともないお前に何が分かるんだ！」

ソニックが叫んだ。

「……………？」

ダークはゆっくりと視線をソニックに向ける。

「仲間がいるから毎日違った景色が見れるんだ！一人でも同じ景色しか見れない。」

「そんなの最初は良くてもだんだん飽きてくるさ！そんなのまっぴらゴメンだね！！」

ソニックはダークに言い放つ。

ダークは何も言わず鼻を鳴らす。

「答える！貴様は一体何者だ！？貴様の狙いは何だ！？」

ずっと黙っていたシャドウが口を開く。

「……それを聞いてどうする？」

ザワッ

ダークの翼が動く。

「今から消える貴様達に教えて何になる！！！」

ドンッ！

ダークがソニック達に向かって猛スピードで飛来する。

ソニック達は咄嗟に構える。

「シャドウ ……!!」

ダークが叫びながらシャドウに向かって飛来してくる。

「ハアッ！」

シャドウもダークに向かって跳躍する。

シュンツ!

二人がぶつかる直前、姿が消える。

「消えた!?!」

テイルスは驚嘆した。

「違う、見えないんだ!」

シルバーが答える。

ドンツ!!

「わあっ!?!」

突如空間に衝撃が奔り、ティルスが驚いて飛び上がる。

ドドガンツドドドドドドガンツドドドドドドドドツッ!?!?!?!

それぞれ別の場所で何度も大きな衝撃が走る。

「シャドウ!」

ソニックは周りを見渡しシャドウを探す。

「ぐあっ」

「!?!」

一瞬シャドウの叫び声が聞こえソニックは声のした方を見る。

「シャドウ!?!」

ソニックの目には吹っ飛ばされているシャドウの姿が見えた。

「ハッ!」

そこにダークが突っ込んできている。

「今行くぞシャドウ!」

ダッ！

ソニックは走り出す。

「ソニック！？」

ティルスは叫ぶ。

????????????????

「ぐっ！」

シャドウは吹っ飛ばされながらもダークを睨む。

「シャドウ　！」

ダークがシャドウに向かって飛来しながら片手を向ける。

「ハアアッ！！」

バキィッ！！

「ガッ！！」

ドガ　　ン！！

突如現れた青い影に蹴り飛ばされダークは地面に叩きつけられる。

「シャドウー！」

正体は言うまでもなくソニックだった。

「……何をしに来た？」

シャドウは冷たくそう言い放つ。

「まあそう言うなって。」

ソニックは呑気に言う。

シャドウは鼻を鳴らす。

ギョオオツ！

ダークが体勢を整え、ソニック達を睨みつける。

「邪魔なハリネズミめ」

ダークはギリギリと齒軋りをする。

「へっ！行くぜシャドウー！」

ソニックはそう言つとダークに向かって跳躍する。

「フン。」

シャドウも同じようにダークに向かっていく。

「二人まとめて潰してくれる！」

ダークも二人に向かって跳躍する。

????????????

「二人共どこ行っちゃったんだろっ……っ？」

テイルスは不安そうな顔をしながら呟く。

「ダークの姿も見えないぜ！」

ナックルズも周りを見回しながら叫ぶ。

さっきから分かることと言えば様々な場所で大きな衝撃が走っていることくらいだった。

ドンドンドンドンドンドン……ドガンッ……ドンドンドンドンドンドンドンドン……ドッ……!!

「お、おい!さっきより音が早くなってないか!？」

シルバーの言うとおり空間に走る衝撃音が先程より早くなっている。

その時だった

バババツ！

「あっ！」

ソニックとシャドウとダークの姿が見えるようになった時、テイルスは感嘆の声を上げる。

「ソニック！シャドウ！」

シルバーも彼らの名を呼ぶ。

スタツ！

ソニックとシャドウ、ダークの三人は互いに距離を取る。

ヒュウウウウウウウ

三者の間に静かに風が吹く。

「…………クッククク…………ハ
 ツハツハツハツハ！！！！！！！！
！」

ダークは突如狂ったように笑い出す。

「HEY！何かおかしいんだ！？」

ソニックは思わず尋ねる。

「 貴様達は仲間と組んでも本当にこの程度なのか？」

ダークの不気味な視線にも動じず、シャドウはダークを睨み続ける。

「ヘッ！俺達はまだ全然本気なんか出しちゃいないぜ！？」

ソニックはダークに人差し指を立てる。

「戯言を…………このまま貴様達を消すのは簡単だが…………楽しみは取っ
ておこつ。」

1ヶ月後に俺はさらに力を付け

人類を滅亡

させる。」

「何だつて!?!」

ティルスが聞き返す。

「それまでもし貴様達が俺と戦う気があるのなら来るがい。まあどうせ無駄だろうがな……」

そう告げるダークの周りに黒い煙が集まる。

「ダーク! 僕の問いに答えろ!」

シャドウはダークに尋ねる。

ダークは答える代わりにクツクツクと不気味な笑いを響かせる。

「
楽しみにしているぞ……………」 『兄弟』 「

「何っ!?!」

言の端が気にかかりシャドウは聞き返す。

「ダーク! 『兄弟』とはどういう意味だ!?!」

「フッフッフッフ
」

シャドウの声に動じることなく不気味な笑いを浮かべながら、ダークは闇へと消えた。

LEFT RIDDLE (後書き)

新たな謎を残したダーク。

ソニツク達はダークを倒すことは出来るのか？

そして、ダークの言う『兄弟』とは一体？

次章「Gathering pieces」に続く！

第一章「Birth of ultimate」無事終了！

DESPERATE STRUGGLE (前書き)

第二章 スタート!

DESPERATE STRUGGLE

「で、貴様達は一人加勢したにもかかわらず結局マスターエメラルドを守れなかった訳じゃな？」

司令室の大きなモニターの下でエッグマンは背を向け尋ねる。

ソニック達はあの後再びエッグマンの基地を訪れていた。

「……ああ。」

ナックルズが力無く答える。

「……このお！この前のワシの苦勞は何だったんじゃ！」

エッグマンは振り返ると同時に怒った表情を見せながら叫ぶ。

「まあそう言うなってエッグマン。しょくがないじゃん、今回は相手が強いんだからさ。」

ソニックは呑気に答える。

「しょうがないじゃと！？貴様らが潜入してきたおかげで後始末が

大変だったんじゃないぞ！

山のようにあるロボットの残骸の処理をせにゃあならんわ、手伝いロボットは役に立たないわ、あのリーダーを作ったせいで材料が足りなくなつて優秀な手伝いロボットも開発できんわ……」

（ 殆どロボット面の問題じゃないか……。 ）

シルバーは呆れた面持ちになりながら思う。

「で、今回もまた貴様らがワシの所へ来る時に多量のロボットをぶっ壊したせいでまたワシは六時間もかけて掃除せにゃならんんじゃないぞ！……」

エッグマンはカンカンになりながら言う。

「だって襲いかかって来んだもん。壊すしかねえじゃん？」

ソニックは再び答える。

「何を〜！」

エッグマンは地団駄を踏む。

「ねえ、今は喧嘩してないで早くマスターエメラルドを元に戻すための方法を考えようよ。」

テイルスが二人の間に割って入る。

「……む、そうじゃった。」

顔を真っ赤にして怒っていたエッグマンはふと我に帰り、モニターに身を向ける。

「さて、どうするものか……」

エッグマンは何も映っていないモニターを見上げる。

「もう一回レーダーで探すってわけにはいかないのか？」

ソニックは腕を組み尋ねる。

「前回レーダーを使ったのはマスターエメラルドが大きなエネルギー反応を持っていたからじゃ。じゃが、その大きなエネルギーが小さくバラバラになってしまった訳じゃ。欠片のエネルギーの大きさが分からぬ限り、レーダーで探すのは不可能に近い。」

エッグマンは背を向けながら答える。

「よくするに欠片が一つでもあればレーダーは作れるってことだな？」

ソニックは大きく伸びをする。

「そういうことじゃが、貴様のことだ。探しに行くだけでも言うんじやろっ？」

「ここでジツとしてるのも退屈だからな。ちょっと欠片を探すついでにひとつ走りでもしてくるぜ。お前もどうだシャドウ？」

ソニックはそう言いながら部屋の隅で目を瞑りながら腕を組み壁に寄りかかっているシャドウに尋ねる。

「…………断る。」

シャドウは目を開けることなく答える。

「…………hum。じゃあ、行ってくるぜ！」

ヒュッ！

ソニックはそう告げると部屋から走り出ていった。

「…………たく、呑気な奴だぜ。」

ナックルズは呆れたように言う。

「あいつも変わらないな。」

シルバーは少し微笑む。

「でも、ソニックだけで平気かな？ダークの生み出した怪物って危ないと思うんだけど…………」

テイルスが不安そうに言う。

「あいつなら大丈夫さ。」

ナツクルズはテイルスの方を向き答える。

そんな一同の傍らでエッグマンはため息をついた。

????????????????

ゼエ

ゼエ

薄暗い森の中を誰かの荒い呼吸が響く。

「(ゼエ)

ち

(ゼエ)

くしょ

(ゼエ)

う

「彼」は大木の下に寄りかかり、そのまま力無くドツと音を立てて座り込む。

ズキンッ！

「うぐっ!!」

左腕に激痛が奔り、「彼」は思わずもう片方の手でおさえる。

……一体どこまで来たんだ？

やっとの思いであの草原を出てからこの森の中に入り、「彼」は一人森の中をさまよっていた。

傷ついた体も癒える間がなかった。

それどころかますます悪化しているような気さえする。

コッッ

「……………？」

腕をおさえると指先に何か硬い物が当たる。

「……………くっ！」

伸ばすと激痛が奔る腕を必死に伸ばし、当たったものを掴む。

「……………銃？」

「彼」は霞む目で必死にそれを見る。

（何でこんな物が？）

ズキンッ！！

そう思うと同時に頭に激痛が奔る。

「ガ!!……う……う……あ……!!」

あまりの激痛に「彼」は思わず銃を落とし頭をおさえる。

(……な……何だ……この感じ……?)

激痛が奔る中、「彼」は感じた。

な　　懐か　　しい　　？

「……そうだ……これは俺の銃だ……」

ガバツ!!

そう感じた瞬間

「ソニック……?」

突然ピンク色の体のハリネズミの少女が現れ、抱きつかれる。

「ぐあッ！」

その衝撃で体に激痛が奔る。

「もお、こんなところに居たのね！この森薄気味悪いから探すのを止めようと思ったんだけど、やっぱ探してよかった！」

だが、嬉々とした少女の声は悲鳴にかき消される。

「ぐ…が…!!どいてくれ！」

「彼」は切実に叫んだ。

「嫌よ、折角会えたのに！あ、分かった！いきなり抱きつかれたから恥ずかしいんでしょ？
もお、ソニツクったらシャイなんだから！」

少女が相変わらず抱きついてきながらグリグリ頭を寄せて言う。

（ 誰だよソニツクって!! ）

「……どいてくれて言うてるだろ!!」

「彼」が叫ぶと同時に少女の体がビクツとなった。

ズキンッ!!

「彼」は叫んだ後再び体全体に激痛を感じうずくまる。

「……ソニック……?」

少女がそっと「彼」から離れる。

「……ソニックって誰のことだ……」

「彼」は痛みにはうずくまりながら必死に言う。

「……ソニックじゃない!? しかもあなた怪我してるの!？」

少女は叫ぶと同時に「彼」に近づく。

「……こんぐらい……大丈夫……グアッ!!」

立ち上がるうとするが、再び激痛が走り膝をつく。

「……ゼエ……ゼエ……」

「彼」は苦しげな表情を浮かべて荒呼吸をする。

「大丈夫じゃないじゃない! 待っててね! 今誰か呼んでくるから!」

少女は振り返り、走り出そうとするもその足が止まる。

「えっ……!？」

「彼」も思わず顔を上げる。

「なっ……!？」

二人は驚愕する。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!!!!!!!!!!!!」

二人の目の前には漆黒の巨大なライオンのような姿をし、背中に悪魔のような大きな翼を生やし、全身から牙のような鋭い刺を出し、その上頭からさらに手を二本生やしているまさに化け物と呼ぶにふさわしい生物　「ダーク・ザ・ガーズ」が立ちはだかっていた。ガーズは獰猛そうな目で二人にを睨みつけている。背筋が寒くなるほどの鋭い敵意が感じられた。

「な、何なのこいつ！邪魔しないで！！」

少女はどこからか巨大なピコピコハンマーを取り出し構える。

「く………！！」

（　　そんなもので戦おうなんて無茶だ！）

そう思い、必死に体を動かそうとするもなかなか言うことを聞かない。

「ヤアアアアアア！」

少女がピコピコハンマーを振り上げながらガーズに走りこむ。

「……よ、よせ！危険だ！」

「彼」は叫ぶ。

ドオオオン！！

ピコピコハンマーが勢い良く振り下ろされた。

「あら？」

しかしその姿は無い。

少女は周りを見渡す。

キッ！

「彼」は遠くの木の上を睨む。

そう、「彼」には見えていたのだ。

ハンマーが振り下ろされる直前、ガーズが目にも見えぬ早さで遠くの木の上に跳躍したのを。

「グウウウウウウ……!!!!」

ガーズが少女に殺意を向けているのが分かる。

「くっ……!!」

(彼女が危ない!!)

ググググググググ !!

「く……く……!!」

そう思い、激痛の奔る腕を必死に動かし銃を掴む。

「グオオオオオオオオ!!!!!!」

バツ!!

ガーズは木の上から少女に向かって勢いよく飛来する。

「えっ？」

少女が振り向くと同時に悲鳴をあげる。

(動け
!!!!!!!!!!!!!!)

ドオンッ!!!!!!

「グギヤアアアッ!!」

ガーズは少女に襲いかかる寸前に吹っ飛ばされる。

ドザアアアッ！！

そのまま地に叩きつけられた。

（ ハッ！？ ）

一瞬何が起こったか理解できなかった。

ただ分かるのは自分が銃をあゝの怪物に向けており、その銃口から煙が出ていることくらいである。

「 えっ！？ 」

少女は目に涙を浮かべ、小さく震えながらこつちを振り返る。
相当怖かったのだろう。

「 ゼエ ゼエ 」

「 彼」の息は荒い。

「 ゲウウウウウウ……！！ 」

ガーズがよろよろ立ち上がりながらこちらに殺意を向けてくる。

「 ……ぐっ…… 」

（ こりゃ……死ぬかもしれないな。 ）

「彼」は覚悟を決める。

「……ウゲツ！！！！！」

「彼」は痛みを強引に押しつけて立ち上がる。

ガクガクガクガクガクガク！！！！

「彼」の足が痛みで震える。

チャキッ！

そして片腕を腰のベルトに伸ばし、もう一丁銃を取り出す。

そっだ　俺はこっせって戦ってきた……！

「彼」は構えた。

「グウウウウウウウウウウウ……………グオオオオオオオオオオオ
！！！！！！！！」

ガースもこちらめがけて咆哮をあげる。

「もう止めて！！」

少女が涙を流しながら叫ぶ。

「……………？」

「彼」は目の前がぼやけてよく見えなかったが視線を少女に向ける。

「うっ……………そんなことをしてたら……………そんなひどい怪我を負ってる
のにそんなことしたら……………本当に
死んじゃうじゃない！！」

少女は必死に叫び続けた。

「……………気にすんな。ここは俺に任せるんだ。ぐっ……………お前
は早く逃げろ。」

「彼」は必死に声を振り絞り、苦痛に顔をしかめながらもぎこちな
い笑顔を作った。

「でも……!!」

「早く行けえっ!!!!!!!!」

「彼」は叫んだ。

「……………」

ダッ!!

少女はうつむき、「彼」に背を向け走り出した。

「…………グオオオオオオオオツ!!!!」

バツ!!

ガ―ズは少女に顔を向け、襲いかかる。

ドオンッ!!ドオンッ!!!!!!

バチッ！！！！

「ガアアアアアッ！！！！！」

ガーズは足を撃たれ、体勢を崩す。

「ウグッ！！！」

銃を撃った反動で「彼」の体にも激痛が奔る。

ガクッ！

それと同時に膝が曲がる。

ガクガクガク ！！！！

「グウウウウ！！！」

ガーズも体勢を整えてこちらを睨みつける。

「彼」は旋回しながら二丁の銃でガーズに弾丸を放つ。

バスッ！！バスッ！！

鈍い音を立て弾丸はガーズに命中する。

「ガアッ！！」

バツ！！

しかし弾丸を物ともせずガーズは「彼」に向かって跳躍する。

「なッ！？」

「彼」はその光景を見て絶句する。

「ガアアッ！！！！」

ガーズが「彼」の頭上で太い腕を振り上げる。

「くっ！！」

ジャキツ！

「彼」は銃を素早く弄った。

ブンツッ！！

ガーズの腕が振り下ろされる。

「くっ……！！」

(間に合ってくれ！)

ババツ！！

「彼」は銃を突き出す。

バチィツ！！！！

火花が飛び散ると共にガーズの腕が止まる。

「ガッ!？」

「……何とか間に合ったか。」

ふう、と「彼」は小さく息を吐く。

銃口から出た小さなレーザーが剣となりガーズの腕を受け止めていた。

だが、そう安心していられなかった。

「ギギギッ……!!」

ガーズは腕に力を入れる。

「ぐぐぐっ……!!」

「彼」も力を入れるが、ただでさえ瀕死の状態である上に力の差は歴然だった。

「ガアッ!!」

ドガアッ!!

「ぐがつ！」

あっけなく「彼」は地に叩き落される。

ドサッ！！

「グハッ！」

「彼」は勢いよく地に叩きつけられた。

「クツ」

「彼」は地に臥したまま顔を上げる。

「！！！」

そして驚愕する。

「ガアアッ！！！」

そこにガーズがドカドカと音をたてて突進してきているのが見えた。

ドガアッ！！！！

「!?!?!」

大きく吹っ飛ばされると同時にあまりの苦痛に「彼」の意識も飛ぶ。

? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ?

俺は今

どろりとしている

?

ワカラナイ

俺は 誰だ ?

ワカラナイ

ドクン!

背中が熱い。

?

「彼」は腕を伸ばし背中「ある物」を取り出す。

コレハ ?

手に取った物は鈍く金色に光っている黒い物体。

ソウダ

コレハ

「彼」は目覚める。

????????????????

「ハッ!!?」

「彼」は我に帰った。

今分かるのは自分が今吹っ飛ばされていること。

自分が手に拳銃ではなく広い銃口と大きな形のレーザー銃らしきものを持っていること。

そして

「グオオオオオオ!!!!」

奴が ガーズがこっちに向かって猛進していること。

「 これで決める！」

ババッ！

「彼」は吹っ飛ばされながら体勢を整え銃口をガーズに向ける。

シューウウウウウウウウ！！

銃口に光が集まる。

「グオオオオオオオオ！！！！」

ガーズはこちらに向かって荒っぽく肉薄しながら吠える。

「 貫けえ！！『グレネードフラッシュ』！！！！」

ドオンッ！！！

ガーズに向かって光のビームが放たれる。

「ガツ！？」

キキキキ

！！

ガーズは止まろうとするが間に合わない。

ズガアアッ！！！！

ガーズは光線をまともに喰らった。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

その刹那ガーズの体が眩く光り、傍目からは何が起きたか判断でき

ない。

シューウウウウウウウウウウウ

ドザアッ!!

光が消えると、ガーズはその場に崩れ落ちた。

ドカアッ!!

吹っ飛ばされていた「彼」の体がそのまま大木に直撃する。

「ぐあっ!!--!」

ドサッ!

「彼」は地に落下する。

「
へ、へ
やっ
た
ぜ
」

少しだけ笑顔を浮かべ、「彼」は意識を失った。

????????????????

そのまま数分が経った。

ギッ

その姿は動き出す。

「ググググ
！！」

よろよろ立ち上がり、周りを見渡す。

「！」

そして、遠くに倒れている朱色のハリネズミの姿を見つける。

「ゲウウウウウウウウウウ！！！！」

ガーズは唸り声を上げながら「彼」に近づく。

その時だった。

シュンッ！！

ドガアッ！！！！

「ガアッ！！！！？」

突然青い影が現れ、ガーズの腹部に突撃し体を貫いた。

トッ

その青い影
り立つ。

いや、その「青いハリネズミ」は木の幹に降

「　　へへっ！」

ハリネズミ

ソニックはガーズに人差し指を立てる。

『H I K E』（前書き）

明けましておめでとうございます！今年度もよろしくお願いいたします
／（＊、、（、））

『HIKE』

「くっ」

意識が戻り、「彼」は静かに目を開ける。

（天井？）

森で倒れたはずなのに
間を感じる。

黒い天井をぼんやりと見ながら疑

今分かるのは自分が森でなくどこかの建物内の一室でベッドに横た
わっていること。

自分の体の至る所に包帯が巻かれていること。そして傷の痛みが大
分和らいでいること。

そして静かに周りを見回す。

チャプチャプ……

すぐ傍で水の音が聞こえる。

「彼」はゆっくりと音のする方に視線を向ける。

「フンフンフン」

ピンク色の姿が向こうを向いて座り、鼻歌を歌いながら何かをやっている。

「ん……………?」

(この子 　　もしかして 　　)

「彼」はゆっくり体を起こす。

「え?」

その物音に気づいたらしくピンク色の姿がこちらを向く。

「あ……………えと……………」

言葉が見つからず、「彼」は口ごもる。

「起きたのね!おはよう」

少女は笑顔を浮かべ躊躇無く言った。

「あ……………おはよう……………」

「彼」もとりあえず挨拶をした。

「……………もしかして君はあの時の……………?」

「彼」は少女に尋ねる。

「あたしはエミー・ローズ。あの時は助けてくれてありがとう。」

少女 エミーは立ち上がりこちらを向きながら言う。

(やっぱり……！)

「けど、何で君がここに？っていつかここはどこだ？」

「彼」が尋ねた瞬間

プシュ　　！

「Good morning！具合はどうだ？」

突如ドアが開き青いハリネズミと黄色い子ギツネが部屋に入ってくる。

「あゝ！ソニック〜！」

ガバツ！

するとエミーが突如ソニックに近寄り思いつ切り抱きつく。

「おわっ！？ちょ、エミー！？」

「ハハ…ごめんね。気にしないで。」

抱きつくエミーに抵抗するハリネズミの代わりに子ギツネが少し困った表情を浮かべて言う。

「あんたらは？」

少し怪訝そうな面持ちで「彼」は尋ねる。

「俺はソニック。ソニック・ザ・ヘッジホッグだ！」

「僕はマイルス・パワー。皆からはテイルスって呼ばれてるよ。」

ソニックとテイルスは簡単に挨拶をする。

「ここはDr・エッグマンの基地の中だよ。」

テイルスがあとけない笑みを浮かべる。

「Dr・エッグマン？」

「まんまるっこいヒゲのオッサンさ。お前の名前は？」

ソニックが尋ねる。

「……………」

しかし「彼」は何も言わず表情を曇らせた。

「？」

ソニックは首を傾げる。

「分からないんだ。」

そして弱々しく言う。

「……………どういつことだ？」

ソニックは腕を組み尋ねる。

「分からない。俺が誰なのかも……………今分かるのは、この銃が俺の物であるということだけだ。」

そう言いつつ、「彼」は座った状態で腰に手を伸ばす。

「……………!？」

しかし、そこには何も無い。

無いのは銃だけではなく、体に巻いていたベルトが二本とも無くなっている。

「な……………俺の銃は!？」

「彼」は慌てて周りを見回す。

「……………ここにあるよ。」

テイルスが二本ベルトを取り出した。

「彼」はホツとし、再びゆっくりと体を倒す。

テイルスはベルトを近くのテーブルの上に置いた。

「……それにしても一体どうなってるんだ？俺は森で倒れたはずなのに……」

「彼」はソニック達に顔を向けて尋ねる。

「あたしがあの後森を出たら偶然ソニックに会ったの。それで二人と一緒にあなたを助けに行ったのよ。ね、ソニック。」

「まあ〜そんなとこかな〜。」

得意げな笑顔で言うエミーにソニックは呑気に答える。

「あの化け物はやつつけたぜ！」

ソニックは親指を立てる。

「……あの時まだ倒せてなかったのか……」

「彼」は少し驚いたように視線をソニックに向ける。

「けど、あいつは殆ど動けない状態だった。あいつを倒したのは俺じゃない、お前さ！『ハイク』！」

「『ハイク』？」

笑顔で言ったソニックの言葉の端が気になり、尋ね返す。

「名前が無いってのもなんだからな。名前が思い出せるまで『ハイク』って名前はどつだ？
悪くない名前だろ？」

「『ハイク』か……悪くない名前だな。」

『彼』 いや、ハイクは笑顔を浮かべる。

「んでもって奴からマスターエメラルドの欠片もGET出来たし、後はハイクが元気になるのを待つだけだな。」

「マスターエメラルド？」

ソニックは今までの経緯をハイクに話した。

「カオスエメラルド」という不思議な力を持つ宝石のこと

「ダーク」の存在のこと

カオスエメラルドがそのダークに操られていること

カオスエメラルドを止めるために必要な「マスターエメラルド」が盗まれてしまったこと

「……なんか色々大変そうだな。」

ハイクは話を聞き終えると複雑そうな顔をする。

「ああ。早くマスターエメラルドを復活させてダークを倒さなきゃな。そのためにはエッグマンが早くリーダーを作ってくんないとな。」

「ちょっと様子を見に行ってみようか？もしかしたら僕に手伝えることがあるかもしれないし。」

しばし黙っていたテイルスが口を開きソニックの方に向き直る。

「そうだな。ちょっと行ってみるか。エミー、ハイクを頼むぜ。」

プシュ　　！

そう言うと二人は部屋を出ていった。

????????????????

プシュ　　！

自動ドアが開く。

「エッグマン、調子はどうだ？」

部屋に入ると同時にソニックは部屋の奥の作業台でガチャガチャと音を立てて何かを作っているエッグマンに声をかける。

「たった今五つ目が完成したところじゃ。」

「五つ目!？」

ティルスは目を見開いた。

「あと一つじゃ。」

「いや、そういう問題じゃなくて……何で六つも作ってるの?」

ティルスは少し呆れて尋ねる。

「……ダークは言っていたんじゃろう? 『一ヶ月後に人類を滅亡させる』と。あまり時間がない状況で一々あっち行ったりこっち行ったりしては間に合わん。手分けして集めた方が早いというわけじゃ。」

エッグマンは背を向けたまま言う。

「なるほどねえ。流石に考えてるんだなエッグマン。」

ソニックは呑気に言う。

「ふん。貴様らとはここが違うんじゃ。こ・こ・こ・が!」

エッグマンは自分の頭を指さしながら憎たらしく言う。

「エッグマン、僕に何か手伝えることはあるかな?」

ティルスが尋ねる。

「無い。もう少しで完成じゃ。司令室で待つとれ。」

エッグマンは相変わらず背を向けたまま言つ。

ソニックとテイルスは顔を見合わせると踵を返した。

????????????????

プシュ　　！

ソニック達が司令室に入るとナックルズ、シャドウ、シルバーがそれぞれ離れて座っていた。

「な……何か重々しい空気だね……。」

テイルスは苦笑いをする。

「……どうだったんだ？あいつの様子は？」

ナックルズは顔も上げずにソニックに尋ねる。

「ハイクか？問題無いぜ！」

ソニックは親指を立てる。

「ハイク……？それがあいつの名前か？」

シルバーが尋ね返す。

「いや、記憶を失ってたから俺が名付けたのさ！」

「名付けたって……お前なあ……」

ナツクルズはため息をつく。

プシュ　　！！

ソニック達が話しているとエッグマンが司令室に入ってきた。

「完成じゃ。」

そして手に持っていた少し大きめの箱をドサツと音を立てて床に置いた。

「ずいぶん遅かったな。」

そう言いつつ、座っていた三人が立ち上がる。

そしてエッグマンが箱の中から一つ小さなレーダーを取り出す。

「これがマスターエメラルドの欠片のエネルギー反応を探知するレーダーじゃ。それぞれ一つずつしか
レーダーに映らんが、それさえ注意して使えば問題無いじゃろ。」

「All right!」

「欠片は全部であと六つか。」

ソニックとナックルズが続げざまに言う。

「……ちよつと待ってくれ。一人足りなくないか？」

シルバーが周りのメンバーを見る。

「……俺にテイルス、ナックルズ、シャドウ、シルバー……確かに一人足りないな……」

ソニックがメンバーを数えて言った。

(ジ……………)

全員の視線がエッグマンに集中する。

「……………のわっ!?何じゃ!」

視線に気づいたエッグマンは思わず後ずさる。

「……………皆、足りない分はエッグマンでいいよな?」

ソニックが静かに周りのメンバーに同意を求める。

案の定全員が頷く。

「な、な、な、なんじゃ貴様ら！？何で全員目を光らせてこちらに歩み寄ってくるのじゃ！？
と言っかソニツク！その笑みは何じゃ！？」

エッグマンが冷や汗を垂らし後ずさっっていると

「じゃあ俺が行こう。」

突如ドアの方から声が聞こえ、全員が振り返る。

「ハイク！？」

正体は頭から大きな毛の生えた朱色のハリネズミ

ハイク。

「時間が無いんだろ？俺も行くさ。」

ハイクは装着した二本のベルトの片方腰のベルトから拳銃を取り出す。

「けど、君は……！！」

「怪我なら治った。もう動けるさ。」

ティルスの言葉を遮り、ハイクが言う。

「そ、そうじゃ！奴に行ってもらおうんじゃ！」

エッグマンはホッと胸をなでおろした。

「……チッ」

「誰じゃ！？今舌打ちしたのは！？」

「All right！ハイク、ついてきな！」

そう言つとソニックは一人部屋を後にする。

「？」

疑問に思いながらもハイクはソニックの後を追った。

????????????????

ソニックの後を追つてハイクがやってきたのは基地内の大きな広場のような所だった。

「よし、ここら辺でいいだろう。」

ソニックは周りを見回す。

「一体何をするんだ？」

ハイクはずっと気になっていたことを尋ねる。

「戦う前には準備運動も必要だろ？」

そう言いながらソニックは屈伸する。

「…………？」

ハイクは複雑そうな面持ちで首を傾げる。

「奴等と戦いに行く前に、まずお前の身体能力を見せてもらいたい。

…………この俺を捕まえてみな！」

ビュンッ！

そう言うとソニックは広場を音速で走り回る。

「え？」

ハイクは訳が分からないと言いたげな面持ちで周りを見回す。

ソニックは大きく跳躍したりしながら走り回る。

「どうした？早く来いよ！」

ソニックの声は聞こえるが、姿が見えない。

「…………よし、捕まえてやる！」

ビュンッ!!

笑みを浮かべたハイクはそう言うと猛スピードで走り出した。

「おっ!?!」

ソニックは乾いた口笛を吹く。

「行くぜ」

「Come on!!」

ハイクは朱色の光、ソニックは青い光になって広場を走り回る。

ガバツ！

「おわっ！」

数分後、ソニックは足を取られ転倒した。

「捕まえたぜ、ソニック！」

ハイクも同じように転びながら笑顔を浮かべる。

「へへっ！なかなかやるじゃないか！」

二人は立ち上がる。

「二人とも何やってるの？」

テイルス達が建物の中から出てきた。

「まあちよつとな。けど、これなら心配なさそうだ！」

ソニックはハイクに笑顔を浮かべる。

「勿論だ！」

同じようにハイクも笑顔を浮かべる。

「……………」

テイルスは一人首を傾げる。

????????????????

「じゃあ、ここで一旦別行動だね。」

基地を出るとテイルスが無邪気に微笑んで言う。

「ああ、早くマスターエメラルドを復活させてやるっぜ!」

「フン、相手にとって不足はない。」

「そして必ずダークを倒そうぜ。」

ナックルズ、シャドウ、シルバーが続く。

「じゃあ、また後でな!」

ハイクも笑顔を浮かべる。

「Let's move on!」

ダッ!!

ソニックの掛け声と共に、六人はリーダーを持って別々の方向に走り出した。

BRavery

ヒュルルルルルル

二本の黄色い尻尾を回転させてテイルスは宙に舞い上がる。

「うーん……ここからかなりあるな。」

そしてレーダー上の遙か離れた場所にある該当ポイントを見てため息をつく。

「……あ、そうだ！」

そう呟くと彼は突如Uターンし、目的地とは別方向に向かって飛んでいった。

「よつと。」

トンッ

テイルスは自分の作業場
舞い降りた。

「テイルス・ラボ」の扉の前に

「確かあの辺に……」

そして彼はラボの周辺を歩き始める。

「あつた！」

ラボの反対側まで来ると壁についているスイッチを見つけた。彼はすかさずそれを押した。

ピッ！

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

するとスイッチの隣の壁が重たげに回転し、大きな扉が出来る。

グイイイイイイイイイン！！

そして中から紅色の少し大きな一人用の飛行戦闘機「トルネードEX号」が大きなベルトコンベアーに乗せられ運ばれてきた。

「こんな時のためにちゃんと整備しておいて良かった！」

「トルネードEX」は過去にテイルスが対エッグマン用に開発した完全戦闘機だった。

戦闘だけではなく、移動用にも最適なマシンだ。

しかし、作られてから一度も使われたことは無かった。その理由は至って単純である。

危険だったのだ。

この戦闘機には様々な武器が内蔵されており、心優しい彼にはとても扱えないマシンとなった。

このマシンは「本当に必要な時」にしか使わない　彼はそう決めていた。

「　　今がその『本当に必要な時』なんだよね。」

テイルスは「トルネードEX」の操縦席に座りながらまるで誰かに話しかけるように独りごと。

本当はこのマシンは使いたくない。けど、あいつから

　　ダークから世界を救うためには

仕方が無いよね。

操縦席のシールドが閉まる。

グイッ！

テイルスはエンジンレバーを引っ張る。

「エンジン全開！エメラルドの欠片の反応ポイントまで全速力！！」

ピピピピピピ……

ポウッ！！

テイルスが操縦桿の横にある小型キーボードを押すとトルネードEXの噴射口から勢いよく火が吹き出る。

「『トルネードEX』、発進！！！！！」

ゴワアアアアアアア！！

テイルスが叫ぶと耳を劈くような轟音をたて「トルネードEX」は青空へ猛スピードで飛び去った。

????????????????

気がつくとも雲の上に飛び出していた。

キイイイイイイン！！

「トルネードEX」は飛び立ってからまだ十分程しかたっていないのに該当ポイントまでかなり近づいた。

「快調快調！あともう少しだ！」

気持ち良さそうにテイルスは呟く。

（ それにしてもダークの生み出した「守護者」って一体どん

な奴なんだろう……？)

それを思うと若干表情が曇り、少しだけ俯く。

その時

「ピギヤアアアアアアアアアアアアアア！……！！！」

ギユンツ！！！！

トルネードEXの隣をまるで鳥のような鳴き声を発しながら、目にもとまらぬスピードで飛空する黒い影がすれ違った。

「うわっ!?!?」

そしてその衝撃で機体が大きく揺れる。

一瞬何が起きたのか分からなかった。

グオオオオoooooooooo!

テイルスはトルネードEXを大きく旋回させる。

「え!?!?」

そしてその姿を見て驚愕する。

奴は姿だけで言うのならば鳥の姿をしている。

だが、その色は漆黒で悪魔のような翼がバサリバサリと大きな音をたてている。尖った耳が垂れ、トゲのようにも見えた。手足は人型だが、獣のような鋭い爪を生やしている。その肢体もトルネードE Xよりも何回りが大きい。

その上グルルと言う唸り声とキラキラと光る眼がこちらに鋭い殺気を向けているのが分かる。

「こ、こいつが……」「守護者」……?」

ティルスの頬を冷や汗がつつたう。

「ピギヤアアアア!!」

ティルスの姿を見てその姿 「ゼラ・ザ・ダーク」は咆哮をあげた。

背筋が寒くなる。

「ぐっ……!!」

ティルスは恐怖心をぐっ と押さえる。

(怖いけど ボクがやらなきゃいけないんだ!ソニックがいなくても、ボクだけでも……!!)

グッ!

操縦桿を引っ張り、再びトルネードEXを大きく回転させる。

「行くよ！ボクが相手だ！」

そして操縦席から叫ぶ。

バツ！！

ゼラもトルネードEXを追う。

バババツ！

ゼラは翼から複数の大きな黒球体を出しトルネードに向かって飛ばしてくる。

「当たるもんか！」

テイルスはトルネードを回転させ、黒球体をよける。

ビッ！

今度は目から紫色のレーザーをトルネードに向かって放つ。

グオオオオン！！

テイルスはトルネードを大きく旋回させてレーザーをかわす。

「今度はこっちの番だ！」

ドドドドドドドドドドドドッ！！

そう叫ぶとテイルスはマシンガンを放ちながらトルネードを旋回さ

せた。

その照準をゼラに合わせよつとする　　しかし、

シュンッ！

「え！？」

トルネードをゼラに向けるとゼラがまるで瞬間移動をしたかのように別の場所へと現れる。

「ピギイイイイ！」

ゼラが笑っているように見えた。

ギユンッ！！

そしてトルネードに向かって一気に肉薄する。

「うわっ！？」

ぶつかる直前に気づき、テイルスはトルネードを回転させて体当たりをかわした。

「ピギヤアアア！」

ゼラは少し離れたところで体勢を整え、再びこちらを鋭い眼差しで睨めつける。

バツ！

突如としてゼラがこちらに向かって一気に飛来する。

「うわっ!?!」

ガシッ!!

そしてトルネードEXを掴む。

掴まれた所はバキバキと鈍い音を立てて軋んでいる。

ギラッ!

操縦席の目の前にあるゼラの鋭い眼光にティルスは改めて恐怖を覚えた。

(このままじゃ勝てない……!)

ゼラのバサリバサリという翼の音がとても大きく聞こえる。

(こっとなったら!)

「完全戦闘モードON!」

ピッ!

ティルスは操縦桿の隣にある「EX」と書かれた赤いボタンを押す。

ビリビリッ!

「ピギヤアッ!」

突如ゼラが吹っ飛ばされる。

先程までゼラが顔を近づけていた所に強い電流が奔ったのだ。ゼラは体勢を整え、少し離れた場所からこちらを睨みつける。

ゴゴゴゴゴゴゴ！

トルネードの翼がさらに二つ出てくると同時に機体の様々な場所から兵器が現れる。

噴射口の数も今までの倍の四つに増えたことで火力もさらに強まり、機体全体が強い電流で覆われバチバチと音をたてる。

「完全戦闘モード準備完了！パワー、スピードともにアップ！行くぞー！」

ギョーンッ！

トルネードがゼラに向かって飛来する。

「ピギイッ！！」

シュンッ！

何度やっても同じだ　　そう言わんばかりにゼラが再び姿を消す。

「逃がさないぞー！」

テイルスはそう叫ぶとトルネードを素早く旋回させる。

「ギッ!?!」

そこにはゼラがこちらに向かって手を伸ばしているのが見えた。恐らく何かの攻撃をするつもりだったのだろう。

ピピピピピピピピピピピピ!

操縦席のレーダーにゼラの姿が映し出される。

「ターゲットロックオン!! 追尾弾発射!!」

ドシュツ! ドシュツ!!

テイルスがそう叫ぶと操縦席の真下にある六つの穴がある発射口から大きなミサイルが次々と発射される。

「ピギッ!?!」

ドンツドンツドンツ!!

しかしゼラの伸ばしていた手から闇色の矢が放たれミサイルを撃墜してくる。

「それなら!」

ピッ!?!

チユイイイイン!!

.....

テイルスが別のボタンを押すとトルネードにくっついてた銃器がゼラを一斉に砲撃し始めた。

「ギッ！」

バツ！

ゼラは素早く上昇し弾丸を全てかわす。

ヒュンツ！ヒュンツ！

そのままゼラは素早い動きで一回転したりするなど少し奇妙な飛び方をする。

(次は何をする気なんだろう?)

額に汗が浮かぶ。

暫くゼラが飛空したところでテイルスはあることに気づく。

(こいつ、トルネードの周りを飛行している！?)

そう、ゼラはまるでトルネードの周りをまるで楽しむかのように飛行していた。

バツ！

そして突如トルネードの周りから離れる。

(今は一体?)

ビ　　!?!ビ　　!!

「!?!」

突如危険信号が鳴る。

「こ、これは!?!」

慌ててレーダーを確認するとテイルスは驚愕する。

トルネードの周りを漆黒で雲状の形をしたとてつもなく強力な電流が囲っている。

しかし気づくのがわずかに遅かった。

バババババババババババババツ!!!!!!!!!!!!

周りの雲状の電流が一斉にトルネードに襲い掛かる。

「うわあああああああああ!!!!!!!!!!!!!!」

操縦席に居るテイルスにも電流の激痛が奔る。

電流は機体にもダメージを与えている。

機体についていた重機が次々と落下していく。

「うつ、くくくくくくくくくくくく……！！！！え
い！！！」

電流が奔る中必死に操縦桿を掴み電流から脱出した。

「ハア……ハア……」

しかし、電流のダメージが大きく息が上がっていた。

「ピギヤアアアアア！！！」

ゼラはその光景を見て大きく咆哮をあげる。

（ ……今のでかなりEXに負担がかかった。残る兵器も少ない。
どうしよう………）

目立った傷一つ無いゼラの姿を見ると、再びテイルスの心に焦りが
生まれた。

「ピギヤアアアアア！！！」

ゼラは更に空高く上昇する。

恐らく上空から一気に飛来しトルネードを貫くつもりなのであろう。

「 ……これだけは使いたくなかったけど、しょうがないよね。 」

テイルスは呟く。

「 禁兵器、『AOITD砲』発射準備！！！」

ピッ！

ティルスが『dangerous』と書かれたボタンを押す。

ガ
！！

トルネードの上部から大きな発射口が現れる。

(……禁兵器『AOITD砲』、トルネードEXのエネルギー残量の九割を粒子砲に変換して発射するまさに「起死回生」の銃。とてつもない破壊力を持つけど、使った後のリスクが高い。運が悪ければ墜落する。本当は使っちゃいけないんだけど、もうこれしか方法が無い。)

ただし、これが効かなければもうなす術は無い。

ティルスは覚悟を決める。

チユイイイイイイイイイイイン！！

発射口に強く青白い光が集まる。

「ギギイ……………！！！！」

ゼラは遙か上空からこちらを睨みつける。

「……………ピギヤアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

そして一気に飛来してくる。

「『AOITD砲』、発射!!!」

ドンッ!!!

発射口から大きな光線が放たれる。

「ピギイイイイイイ!!!」

ゼラは漆黒のオーラを纏い肉薄してくる。

ババババババババババツ!!!

二つの強大な力がぶつかり合い、激しく火花を散らしながらの押し合いになった。

「ギギ……ギギイイイイ!!!」

ゼラから呻き声が漏れているのがわかる。

「ぐ、ぐぐぐ……!!!」

テイルスも歯を食いしばる。

その後も押し合いは続くも両者動じなかった。

ビ　　ビ　　！！

「警告！エネルギー残量残り20%！！」

警告音が鳴り響く。

「このままじゃ……！！」

テイルスの額に汗が浮かぶ。

「ギギギ……！！！！」

ガ　　ガガガガガガガガガ！！！！

今まで動けずにいたゼラがそれでも力づくでこちらに迫ってくる。

「そんな……！！」

テイルスは目を見開く。

「ピギヤアアアアアアア！！！！」

ゼラは咆哮をあげる。

「……………」

そんな死に物狂いのゼラを静かに見据えながらテイルスは微かに俯いた。

焦燥や恐怖を超越したかのような、妙に落ち着いた心境だった。

キッ！

そして迷いを断ち切るようにバツと顔を上げた。

「残りのエネルギー残量を全て粒子砲に変換！！」

そして操縦桿の隣にあるスイッチを押す。

ドンッ！！！！

光線が更に太くなった。

「ギッ！？」

流石のゼラもそれに耐えきれない。

「いつけえええええええ！！！！」

ズガアアアアアアアアア！！！！！！

「ピギヤ　ア　ア　」

『AOITD砲』から放たれた粒子砲がゼラを飲み込み、消滅させた。

ガクンッ！

それと同時にエネルギーを全て失ったトルネードEXが海へと墜落していく。

プシュ　　！！

操縦席のドアが開き、中からテイルスが二本の尻尾を回転させて浮遊しながら脱出した。

ヒュウウウウウウウウ

ドガ　　ン！！

そしてトルネードEXがそのまま海に墜落し爆発するのを何も言わずに見届けていた。

「……バイバイ、『トルネードEX号』……」

その衝撃で激しく直下だつ海柱に少し寂しげな眼差しを向け、小さく手を振る。

バツ！

振り返るとそこにエメラルドグリーン色の美しい光を放ちながらマスターエメラルドの欠片が浮遊していた。

ヒュルルルルルル

テイルスはマスターエメラルドの欠片を手取る。

「……………皆、大丈夫かなあ……………」

そして天を見上げ不安そうに呟いた。

????????????????

人間。それは、憎むべき存在

絶対に許すことの出来ない存在

憎む以外何物でも無い存在

BRAVERY (後書き)

空中戦難しいorz

GENUINE

タッタッタッタッタッタッタ

荒れ果てた高原をナックルズは一人走っていた。
ソニックほどではないが、彼もそれなりに走るスピードが速かった。

「後どれ位だ？」

走りながらレーダーを確認する。

「……………もうちょっと先か……………」

レーダーをしまい、再び顔を上げて走り出す。

数分走ったところで再びレーダーを確認する。

「この辺か……………」

周りを見回すが、あるのはゴロゴロ転がっている大きな岩や行く手を阻む絶壁くらいだった。

(少しここらを探してみるか……………)

そう思い歩きだしたその時

カアッ!!

「!?!」

突如ナツクルズの立っている辺りの地面が光る。

「チツ!」

バツ!

ナツクルズは危険を感じ大きく跳躍する。

ズガアアツ!!

光っていた地面から黄色い閃光が噴き出した。

「誰だ!?!」

スタツ!

ナツクルズはそのまま少し離れた大きな岩の上に降り立つ。

ズンツ!

閃光で大きく開いた穴の中から漆黒の大きな手が出てきた。

「なっ!?!」

あまりの大きさに愕然とする。

「ゴオオオオオオオオオッ！！！！」

その姿　　「ヴァルセル・ザ・ダーク」は地上に姿を現すと大きく咆哮する。

恐竜のような姿をしているが、漆黒の全身で眼だけが不気味に光り輝いている。手足が太く長く、その手にはまるでナイフのような長く鋭い爪が光り輝いている。口も大きく鋭い歯が整然として並んでいる。その巨大さも本物の恐竜を彷彿とさせた。

「な……なんだこいつは……！？こいつが『守護者』か……！？」

悪魔のような雰囲気すら醸し出しているその姿にナツクルズも少し怯む。

「グッ！？」

ヴァルセルは少し離れた岩の上に立っているナツクルズの姿に気づく。

「ゴオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

そして威嚇するかのように再び大きく咆哮をあげた。

ビリビリビリビリ！！

少し離れた場所にいるナツクルズにも振動が届くほどの大きな咆哮だった。

「ゲツ！」

その衝撃で吹っ飛ばされそうになるも両手を前に出しまるで強風を耐えるようなポーズでナツクルズは耐えた。

「ガアッ！！」

「なっ！？」

その隙にヴァルセルがナツクルズに向かって肉薄する。

「チッ！」

バツ！

ナツクルズはその衝撃波から強引に抜け出し、大きく跳躍する。

ガスッ！！

ガラガラガラ……

ヴァルセルの腕が先程までナツクルズの立っていた場所に振り下ろされると鈍い音を立て簡単に大きな穴を開けた。

「なんつー馬鹿力だ……」

跳躍しながらその光景を見ていたナツクルズの額に冷や汗がつたう。

「ガッ！」

ヴァルセルは上空にいるナツクルズの方へ顔を向ける。

「だが、マスターエメラルドを復活させるためにはこいつをぶつ倒さなきゃいけないんだよな。」

ナツクルズは自分の拳をもう片方の拳にぶつける。

「ゴオオオオオオオオオオオオ！」

かかってこいと言わんばかりにヴァルセルが再び咆哮をあげる。

「行くぜ！俺の拳を受けてみやがれ！！！」

ナツクルズはヴァルセルに向かって急降下する。

「でええええりゃあああああ！！！！！」

ドガアッ！！

ナツクルズは落下スピードを利用してヴァルセルの頭に強烈な一撃を喰らわす。

「ガアッ！！！」

その衝撃をもともせずヴァルセルは頭を振りナツクルズを振り落とす。

ズザザザザザア！！

ナツクルズは地面に着地する。
そしてヴァルセルを睨む。

（防御が堅い。殴りまくってダメージを与えてやる！）

「グシヤアツ！！」

ヴァルセルの腕がナツクルズに振り下ろされる。

「ハッ！」

ナツクルズは跳躍し腕をかわす。

ドゴオツ！！

ヴァルセルの腕が地面に突き刺さる。

スチャツッ！

ナツクルズはその腕の上に着地し、ヴァルセルの顔面向けて一気に迫る。

「うおおおおおっ！！」

それと同時に腕を振り上げる。

キラッ！

ヴァルセルの眼が不気味に光る。

ゴワアッ!!

そして大きく口を開け黒い炎を吐き出す。

「んなつ!?!」

ナツクルズもそれに気づくが止まれなかった。

ゴオオオオオオオオオツ!!

そして炎の中に突っ込む。

「ぐあああああつ!!」

とてつもなく熱い炎がナツクルズの体を焼き尽くす。

「……………ぐおおおつ!!」

バツ!!

ナツクルズは大きく跳躍し炎の中から脱出する。

「!?!」

だが、上を見上げた瞬間頭が真っ白になった。

「ゴギヤアアアアアツ!!」

奴が ヴァルセルが片腕を振り上げていたのだ。

バキィッ！！

「ガッ！？」

腕が振り下ろされる刹那、あまりにも大きな衝撃にナックルズの意識が飛ぶ。

ヒュウウウウウウウウ

ドガ ン！！！！

そして上空から地面に勢い良く叩き落された。

「くっ……！！」

ナックルズはよろよろと立ち上がろうとする。

その時だった

ドンッ！！

「ぐああああああっ……！！！！」

ヴァルセルがナツクルズの胴体をその大きな足で全体重をかけて上空から急降下し踏み潰していたのだ。

あまりの苦痛にナツクルズは悲鳴を上げる。

「ゴオオオツ……！」

ヴァルセルが鋭い眼光でこちらを見下ろしている。

「ち……畜生……！！！」

ナツクルズは歯を食いしばる。

俺はまたマスターエメラルドを守れないのか？

マスターエメラルドの「真の守護者」であるこの俺が……

そうだ、俺は「真の守護者」だ

負けられねえ

絶対に負けられねえ！！！！

「ぐおおおおおおおおおおおおおっ！！！！！！」

ナツクルズは潰された状態の腕に渾身の力を入れる。

グググググググググッ！！

ヴァルセルの足が微かに動く。

「ガッ！？」

その異変に気づいたヴァルセルは表情を一変させる。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

そしてナツクルズはヴァルセルの足を持ち上げ立ち上がる。

「ガアアアアッ！！？」

ヴァルセルも力を入れるがナツクルズの勢いは止まらない。

「俺はナツクルズ！マスターエメラルドの「真の守護者」だ！！て
めえらみてえな「偽者」にマスターエメラルドを渡してたまるかあ
っ！！」

ブンッ！！

ナツクルズはヴァルセルを遠くの大きな岩盤めがけて投げつけた。

ズガアッ!!

「ゴギヤアアアアッ!!」

ヴァルセルは岩盤にめり込み大きな亀裂を奔らせた。

ズウウウウウン……!!

そして地面に落下する。

「ギギイッ……!!」

ヴァルセルはこちらに向かって疾走しているナツクルズを睨めつけ立ち上がる。

「ギヤアアッ!!」

ブンッ!!

そして近くにあった大きな岩を掴むとナツクルズ目掛けて投げた。

「おらあああっ!!……!!」

ドゴオッ!!

ナツクルズはその岩に拳をぶつけ粉々に砕く。

「ゴギヤアアアッ!!!」

ヴァルセルは次々と巨大な岩をナツクルズに向かって投げつけるも、ナツクルズはそれらを全て破壊した。

「ギギヤアアアアッ!!!」

ブンッ!!

流石に焦ったのかヴァルセルは自らの腕をナツクルズ目掛けて振り下ろす。

「オラアッ!!!」

するとナツクルズはその腕に自らの腕を振り上げた。

ドガアアアアアッ!!!

拳を通して両者に大きな振動が走る。

「ギギギギ……!!!」

「くっ……!!!」

ヴァルセル、ナツクルズは両者とも顔を歪ませる。

カッ！！

ナツクルズは眼を見開く。

「でええりゃあああ！！！」

そして腕に力を入れた。

バゴオオオオオオオツ！！！！！！

ヴァルセルの体が吹っ飛ぶ。

ナツクルズは再び疾走しだす。

「ギギヤアアアアツ！！！」

しかし、ヴァルセルは体勢を整えこちらを鋭い眼光で睨みつける。

ゴバアアツ！！

そして再び黒い炎を吐く。

「ハアツ！！！」

しかしナツクルズはそのまま炎の中に突っ込む。

「ギギイイツ……！」

ヴァルセルの表情に笑みが広がる。

しかし

「……！？」

ヴァルセルの表情が一変する。

ゴオオと音をたてて燃え盛る黒い炎の中からこちらに向かってゆっくりと歩いてくる
ナツクルズの影が見えた。

「……俺のマスターエメラルドを守りたいという気持ちの熱さはこんなもんじゃねえ」

ポウッ！

そう告げたナツクルズの拳に彼と同じ紅色の炎がまとう。

「ギギギイイツ……！！！」

ヴァルセルは悔しげに歯を食いしばる。

カアアアアッ!!!

そしてその大きな口に黄色い光が集まる。

「ゴオオオオオオオオオオオオツ!!!」

ゴバアッ!!!

そして大きな光線をナツクルズめがけて放った。

「……………」

しかしナツクルズは動じない。

ドガ ン!!!!!!

光線が爆発を起こした。

ナツクルズの居た場所だけでなく広範囲に渡って次々と炸裂する。

「ギギギイ……！！！」

ヴァルセルに再び笑みが浮かぶ。

その時だった。

ドンッ！！！！

「ガッ！！！！？」

頭に大きな衝撃が奔る。

とてつもなく重く、そして熱かった。

トッ！

目の前に拳に炎をまとったナックルズが降り立った。

「終わりだ、化け物め。」

そして静かに言い放つ。

それと同時にヴァルセルの体上部から徐々にピキピキと音をたて

て亀裂が奔る。

カッ！

そしてそのまま爆発した。

そこに残ったのは美しい光を放つマスターエメラルドの欠片。

ナツクルズの拳にまもっていた炎も、音もたてずに消えた。

「手間取らせやがって」

ナツクルズは欠片に近寄り手に取った。

そして静かに天を見上げる。

そこにはどんよりとした鉛色の空が果てしなく続いていた。

????????????

時が経つごとに人間への憎しみは大きくなる

憎しみだけではない

悔しさも湧き上がってくる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2548y/>

ソニック・ザ・ヘッジホッグ「エメラルドの暴走」

2012年1月8日19時54分発行